



始



4年10月
515

71



著

長篇小説

落葉の如く

1924

聚芳閣出版



落葉の如く目次

手紙	211
盗難	181
睨み合ひ	149
落葉の如く	1

落葉の如く

新井紀一

秋である。裸體でゐても汗の出る暑さではあるが、兎に角秋である。秋——どんなにそれは待ち兼ねた、なつかしくも慕はしい季節の知らせであらう。

高く澄んだ空が先づ平次郎の眼に描かれる。その澄明な空中をすい／＼と北に向つて飛んでゆく赤蜻蛉の群——それにはまだ少し早い。油蟬の天下である。しほから蜻蛉の天下である。僅かの間にも可なりの大木となつた裏のボブラに毎日、朝早くからその油蟬が来て鳴き立てる。随分うるさく、また暑苦しい聲である。が、それももう僅かの間だと思へば、そして忽ちに赤蜻蛉の天下になるのだと思へば、我慢のならないこともない。

が、むし／＼した暑さのつよいた後の、今日は朝からの荒れ模様である。それは、

秋と云ふ聲を聞いて執念くつき纏ふその暑さの最後のあがきのやうでもある。焔のやうにも見へる赤茶けた雲の塊りが、南から北へと家根をすれすれに低く飛んでゆく。その度びにボブラは苦しい悲鳴を揚げて、烈しく首を振り身悶へする。風は段々烈しくなつてゆく。

二寸隔きぐらゐに明けた雨戸の隙間から、平次郎はぼんやりその雲を眺め、ボブラの悲鳴を聞いた。それから、たつた今書き終へたばかりの戯曲「滅び行く人々」の上に眼を落した。一九二三、九、一——と、「脱稿の日附を書き込んだばかりの時だつた六月初めに起稿した戯曲で、脱稿した今、彼の頭はすっかり昂奮してゐた。が、苦しい風の唸り聲は、昂奮の中にもやつと重荷を卸したと云ふ安心に陥り勝ちの彼の胸を妙にそは／＼と落ち着きのないものにした。

はつと日が射したかと思ふ瞬間雲が飛んで来て晦くなり、晦くなつたかと思ふと雲

4
が切れて太陽が顔を出す。その明暗はまた直ちに平次郎の心に反射し、彼の心を明るくし、暗くし、そわ／＼させたかと思ふと憂鬱にし……結局、立つて見座つて見、ふらふらつと雨戸の外を覗かせたかと思ふと、ぐいつと引き摺り戻して来て机の上の原稿を覗かせる。……が、兎に角、三月がかりで苦しんで来た戯曲が今やつと完全したのである。これを書かうとした動機……書かなければならんと云ふ決心を起すまでの経緯——それが今夢のやうに彼の頭を掠めた。そして夢のやうに消えて行つた。何は兎もあれ、完成した——と云ふ喜びが今彼の胸を風船玉のやうに何かでふくらましてゐたのである。他の何物の介在をも容さなかつたのである。

彼は風船玉のやうにふら／＼と立上つた。立上つた時電光のやうに鋭く、はつきりと頭の隅に閃いたものがあつた。

——さうだ、今度と云ふ今度こそ、自分に對するあの今西氏の迷妄を醒ましてやる

とが出来る。あれ程に鋭い、何もかもを見破る程に凄い眼を持つた今西氏がなぜ自分に對する時ばかり、あゝもろくも鈍つて了ふのか。洞察と批判の眼が曇つて了ふのか……が、今はもう何も云ふ必要はない。この「滅びゆく人々」が彼の迷妄を醒まし、一切の解結をつけるであらうから。——

彼は急に何んとも云はれない嬉しさが胸先に込み上げて来るのを感じて、その原稿をふところにねぢ込んだ。

兎に角、これは今西氏に讀ませなくてはいけない。そして批評を聞かなくてはならない。彼がどんな顔をするか。——やア、僕は今まで君を見損つてたんだ。君にこれ程の自覚があり、自意識があらうとは思はなかつた。この自覚が恐らく、君と云ふ人間を滅びゆく小森一族から救ふだらう。この作品は決して滅びゆく者の必然の運命を顯つた挽歌でなく、滅びゆく人々の中から敢然と生に向つて奮進する雄々しい反抗の

矢叫びだ。この自意識は渺なくも君一人は救ひ得るだらう。——彼は空想したのである。そして更に、自分に都合のいゝ、自分を甘へさす今西の聲を自分の耳に聞かしたのである。「それにこの作品は藝術的の立場から見ても非常にいゝものだ。渺なくとも今までの藝術の型を破つてゐる。稱めて云へば表現派に一步足を踏み込んでゐる。微かながら、新時代の空気を呼吸する人間の吐息が感じられる」——彼の胸は鼓動を高めてちつと、更に何かを云ひ出すであらう今西氏の口の近くにその耳を持つてゆく。と今西氏は注文通り、彼の豫想通りの言葉をその耳に囁いてくれる。「兎に角かうした作品は今の行き詰まり、だれ切つた文壇に取つて一つの血精注射の役目をするものだ。どこかへ発表したまへ。及ばずながら推薦の勞は取るから」——その時彼はにやりとした會心の微笑を洩らし、更に、こくりと頭を下げて云つたのである。「どうかお願ひします。自分でもうこれ以上のものは一生掛かつても書けないかと思はれる程自信の

あるものですから」

彼は眼を輝かして天井を見上げた。彼はいつか疊の上に寝轉がつて、両手を後頭部に組んで枕にかつてゐたのである。彼は思つた。——さうなれば今西氏のこれまでの激動に對しても自分は責を果したことになるのだ。さうしてうまく行けば、今のやうに月のうち一日と十五日の二日しか休めないやうな労働生活を擲つて、文筆生活に這入れるかも知れない。今西氏なんかだつて今こそあゝして文壇一方の劇作家を以つて自らも任じ他もさう許しては居るやうなものゝ、遂ひ最近までは矢張り、俺同様一介の文學青年だつたのではないか。だから俺だつて……………

雨戸の隙間からどつと烈しい風が吹き込んで來た。雨戸と障子が同時に、がたがたんと烈しく鳴つた。赤つ茶けた雲は依然としてあとからあとからと南の空低く飛んで來る。日影は時々室の中に明暗をつくつて、彼の胸に妙に掴みどころのない不安の

影を投げつける。

兎に角、外へ出やう。家にゐても落ちつかない。——彼はふところの原稿を一寸引き出して再びその中に押し込み、立上つた。彼は足音靜かに階段を降りた。玄關へ出る次の間に、長兄が寝て居るのである。かれこれもう三年にもならうと云ふ長い病床生活であるが、それは彼等の父親が最後の息を引き取つたと同じ頭の病氣であるが、そして、今は更に他の病氣の心臓病にまで犯され、時々發作の現象であるらしい語言を喋るぐらゐのもので、あとは昏々と眠つて居る。あともう半年か一年だらうと云ふ醫者の診斷なのである。

父の死……更に兄の病氣の事を想ふと彼の胸は怪しく顫え戦く。そして更に母の事兄弟の事を想ふと打のめされたやうに鬱憂に、暗い雲に鎖されて了ふ。「滅びゆく人々は實にこの家庭に材を取つたものなのだ。無自覺にも今まで誇りとしてゐた「江戸つ子」……十代から續いたと云ふ江戸つ子の血が遂に小森一家を衰滅に導かうとは、彼の夢想だもしないところだつたのだ。

初めて今西氏を訪ねた日の事を彼は思ひ浮べた。……文學青年らしい好奇心から、今西氏のものを読んでふと會つてみたくなつて訪ねたまでの事であつた。が、その時彼の讀んだものがどういふ作品であり、自分がその時どういふ感想を述べ立てたか、今は彼の頭にはつきりしてゐない。が、兎も角、彼はその時の感想に對して今西氏からあべこべにうんとやつつけられ、すごとくと引き退つたことだけを記憶してゐる。その上、今西氏はその問題を離れてこんな事まで云つたのである。

「君の眼をかう先つきから見てゐるのに少しも落ち着きがない。眼玉が始終でんぐり返るやうに動き廻つてゐる。その上何んかしらかう恐迫觀念にでも襲はれてるやうに……ふむ、どうもその白眼が……いや、その眼全體がいかん。どこか病的だ。」

今西氏はさう云つてから尙もかう骨董品でも鑑賞するやうな工合に、彼の眼をちら／＼眺め、斷案を下すやうに云つたのである。

「君は神経衰弱ぢやないですか？　どうもかう眼の色が……」

「え、ひどい神経衰弱なんです」彼がかう云つたこと勿論である。事實ひどい神経衰弱で、それまで三月ばかりの間やつてゐた電報配達をその爲めに辭めた許りの時であつたから。その當時に見た諸々の現象を思ひ浮べると、彼は今でも自分の頭を疑つていゝのか、それとも、萬事科學に依つて説明出來ると云ふこの自然界を疑つていゝのか譯が分らなくなるのである。月のない眞夜中……眞暗な道を歩いてゐる時彼は時々、あとで考へて兎ても信ずることの出來ない不思議を見た。外燈も録々ついてない郊外の町を、或は畑の中を、たつた一本の電報を配達する爲めに目ざす家まで行く途中……三尺先きも見へない暗さであるに拘らず、二間、三間ぐらゐの距離であらう

か、同じ方向に歩いてゆく人らしいものゝ姿を或る時彼は見たのである。はつと思ふと水を浴びたやうな惡寒を感じて、彼は立ち止まり、眼を凝らした。全身が總毛立つてぶる／＼顫えてゐる。首がない。胴だけの人間がひよ／＼歩いてゆくのである。……何んの判斷を加へる餘地があらう。何んの、眼を定めて凝視し、見窮める勇氣があらう。棒を呑んだやうに固くなつてその怪しの影に直面し、呼吸の音さへ停めてそり／＼と背進し、やがて、元來た道をばた／＼と駆け出すのだ。……電報は符箋付きでその翌朝、他の者に依つて配達されたのである。

幻覺だな。——と思つてみてもその氣味惡さは晝間になつても抜けない。併かも、彼は夜中の配達の度びにさうした厄介なものを見たのだ。或る時はひとだまを……また或る時は一寸法師のがや／＼騒いでゐる群を……

理屈では幻覺として片づけて丁ふより他仕方がない。が彼にはどうしても幻覺とし

て笑ひ捨て、了ふわけに行かないのだ。俺はたしかにこの眼で見たのだもの。——彼に取つてそれはたしかに現實である。

「いろんな幻覺を見て仕様がないうだけれど矢つ張り神經衰弱のせいであらうか」今西氏一流の明快な判断を仰ぎ、信じられないまでもそれに依つて或る程度までの安心を得やうと思つて、彼はまじく／＼と今西氏の顔を仰ぎながら云つたのである。

「幻覺は神經衰弱のせいとばかりも限らんでせうがね……」今西氏は相變らず鋭い一瞥を彼に投げかけ、そして云つた。「神經病と同時に、それは君の恐迫觀念の所産ぢやないですか」

「どうも弱るんです。夜中になぞ一人で歩いてゐると首のない人間の歩くのが見へたり、ひとだまの飛んでくのが見へたり……もう兎ても恐ろしくて……」彼は訴へるやうに今西氏の眼に見入りながら云つた。「そんな風だつたんで到頭電報配達を職首にな

つちやつて、こないだやつと芝浦の製作所へ行くやうになつたんです」

「君はその恐迫觀念がどこから來るか、その精神分析をして見ないぢやいけませんな。その分析に依つて同時に君の幻覺を見るのも癒ほると思ふんだが……」さう云つた今西氏の論法は更に鋭く彼の心臓に迫つて來た。「君は先づ自分自身を解剖臺に載せて有ゆる方面から分析をしないぢやいけません。……例へば、君のお父さんは割合に若い時に死んだと云ふ。そして、今は君の兄さんが同じ病氣で寝てゐると云ふ。その病氣が傳染性でないところから見て直ちに遺傳だと云ふことは分る。君はそれを更にその祖先にまで遡つて検討しなくてはいけない。君は君の代で小森家が十代もつゞいた江戸つ子だと云ふことを自慢にしてゐたが、君は流動しない一つ處に在る水が永く停滯してゐる間に腐ると云ふことを知らなくてはいけない。小森家の人間に流れてゐる血は丁度その停滯した、腐りかゝつた水なのだ。腐りかゝつた血は精神的に益々

頹廢し、頹廢した精神は彌々その血を濁し、性格の上に缺隔を來すと云ふことになる。

……小森君はそれを自覺しないぢやいけない。自覺することに依つて僅かに救はれるのだ。君は小森家に流れる血が……云ふまでもなく君自身を取り上げて検討してみればいゝ。どんな風な状態であるか……勘なくとも君が藝術をやつて行かうと云ふからにはさうした病所を忌憚なく抉り出して解剖してみたまへ。それは同時にいゝ藝術を生むこととなり、君自身を淨化し、救ふことになるのだから」

鋭利な刃物でぐいぐい心臓を抉られるやうに感じながら彼はそれを聞いた。それは決して深い眞理でもなければ今西氏独自の意見でもないだらう。だが、自分自身の上はその言葉を持つて來て當て嵌めて見る時、その深淺は兎に角として恐ろしい程びつたりと當てはまつてゐるのをどうしやう。——彼はその時おづ／＼今西氏の顔を見上げながら云つたのである。

「僕、戯曲に書いて來ます。是非讀んで見て下さい。屹度「カラマソフ兄弟」を芝居にしたやうな深刻なものが出來ると思ひます」

それはもう一年も前のことである。それからと云ふもの、今西氏は彼の顔さへ見れば云ふのである。

「小森君、まだ書けませんか。……決して焦燥する必要はないけれど、君の場合はもう少し一生懸命になる方がいゝでせう。かうした場合の創作はいつかも云つた通り、濁つた血を清新にし、頹廢した精神を淨化すると云ふ役目を勤めるものです。一生懸命にやりたまへ——」

さう云はれた當座こそ、成程——と思つて奮ひ立ちもするのだが、その當時彼をしてどうしても創作に熱中せしめ得ない事件があつたのだ。くだらないと云へばくだらない、平凡極まる或る女との戀愛事件だつたのだが、それがまた恐ろしく今西氏から

冷笑され、冷遇されつとけてゐるのである。

が、今こそ今西氏からも勧められ、自分からも是非書かなければ—と思ひ立つた戯曲「滅びゆく人々」が完成されたのである。一年以來の重荷をやつと卸したやうな氣持ちだつた。足音を忍ばせて階段を降りた彼は、ちらりと次の間に寝てゐる兄の方に耳を聳て、下駄を突っかけると慌て、戸外へ出た。

二

どつと吹きつけた風が眞正面から平次郎の顔を殴りつけ、兩耳を唼鳴りつけた。はつと振り返る間にまた次の奴が來て唼鳴りつけてゐる。何もかもが恐ろしくはしやいで、それはそして、喚き合ひ唸り合つてゐる。家と云ふ家、電柱、電線、立木……地上にある一切のものが樂器の役目をしてゐる。夫々の特徴のある音で鳴つてゐる。

素張らしい交響樂だ。……セロがある。ヴァイオリンがある。ピアノが……太鼓まで……ふつ、ぼこんぼこん鳴つてやがる。破れ太鼓だ。店頭の屋根廂の上の太鼓……づらりと並んだ太鼓……皆んな字が書いてある。トタン張りの太鼓だ。その上に……あいつがセロだ。糸が少し太いな。……赤色の碁子から碁子へ結びつけられてる高壓線だ。その上を樂手の大きな手が神變不思議の妙技を揮つて……だが少し荒つぽいな。「嵐の曲」……ちや少し平凡過ぎる。怒れる……いや、破壊の……どうもいかん、もう少し藝術的な……えゝと「神怒る曲」とするかな。……

烏打帽子の下からはみ出した平次郎の髪の毛がばさ／＼跳つた。彼は幾つかの横丁を曲つて大通りへ出た。銀色の葉裏をひらひら風になびかしてゐる鈴懸が、今更のやうに彼の心臓を揺り立て戦のかした。

雨上りの街路はどろ／＼に泥濘つてゐる。埃の立たないのがせめてもの見つけもの

でめる。その代り、人々は散彈のやうに泥土を自動車のタイヤから浴びせかけられなければならぬ。それこそ、はつと思ふ間もない。その間を電車が走り、自転車が飛んで行くのだ。自然は悉く人間に征服され利用されてゐる。重學と力學と……電氣と磁氣と……有ゆる物理學と化學の原則を基とした都會が、生活が、彼の前に展開してゐる。この大風にもびくともしない煉瓦造り、コンクリート作りの大建築が雲を摩して聳へてゐる。如何にも鈍重らしく、この烈風をふふんと云つたやうに鼻の先であしらつてゐる。風の音もこゝではそれらの文明を讃へる頌歌としか聞へない。

平次郎はふと、いま出て来たばかりの自分の家を思つた。この風に、舟のやうにぐらぐら揺れてゐた自分の二階を思つた。ここでは紙で出来た障子が、この濕氣を含んだ風に逢つて今にも破れさうにばた／＼鳴りはためいてゐたではないか。ぼつ／＼つ明いた穴はひうひう悲鳴を揚げてゐたではないか。ところがこゝで見る大建物の窓々に

嵌められた硝子戸は、びくともしないで透明に、風も音響も埃も……あらゆるものを遮つて、科學以前の紙障子を嘲つてゐる。

彼は電車に來つた。乗つてから初めて、自分がこの風の中を何んの目的をもつて出て來たかを意識した。彼は慌て、腰掛から立上つて、どこへ行く電車であるか、その方向を見た。S行であつた。彼は吻つとした。同時にあの放心状態にあつた際によくも、自分の乗るべき電車を誤またずに撰び得たかを不思議に思つた。S行の電車に乗つた自分の目的に氣がつくと同時に、彼は懐ろにある原稿の事にも氣がついた。今西氏の家へ行つて讀んで貰ふ爲めである事に。……これは創作でありそして脚本ではあるが、要するに自己辨明である。滅び行く道程にある小森一家の人間をモデルにしたものである。その上なほ、身分に纏はつた或る戀愛事件を取り入れてそれを釋明し、この戀愛事件に對する今西氏の理由のない妄斷と嘲笑とを解かんとしたものである。

「君が戀してゐると云ふ女は、そしてその爲めに絶へず苦しめられてゐると云ふ女はそりや決して實在の女ぢやない。これまで不當に抑壓されてゐた君の性慾が、いつの間にか潜在意識となつて君の欲求して止まない異性を頭の中に創造したのだ。……要するにそれは一個の幻覺に過ぎない。君はその幻覺の女に戀し、その幻覺から起る事件に苦しめられ、絶へず恐迫觀念に襲はれてゐるのだ。……君は今ひどい神経衰弱なのだ。頭が變なのだ。君のその厭やにきらきらした眼が何より雄辯にそれを語つてゐる」——

今西氏はさう云つて憫れむやうに自分を見たのである。併し、それは嘔ふべき獨斷であり、虚蒙である。彼れ今西氏は一個のドラマチストである一方、精神科學者をもつて自ら任じてゐる男である。フロイドの「精神分析學」一卷を讀んで、忽ちその智識をあらゆる友人間の上に試み、自分の創作する劇にさへもそれを應用しやうといふ

大膽者である。

「生兵法大怪我の基——つてことがあります、今西さん知つてますか」

その時平次郎はさう云つて今西氏の急所を突つ込んだ憶へがあるが、實際、今西氏の持つてる精神科學なんて薄つべらなもんだ——その時彼は強いて自分を慰める爲め、今西氏を貶なしつけてはみたものの、併し、彼はぎくんと心臓の跳び上るのを隠すわけには行かなかつた。顔にはその驚愕を現はさないまでも、自分自身の心をまで偽るわけには行かなかつた。

今西つて恐るべき眼を持つてゐる男だ——さう思つたのである。今西氏の云ふことが全部が全部本當だと云ふのではないが……彼今西氏の言葉を肯定しなければならぬのが苦しかつた。

「君の一族……つまり小森家には遺傳的に精神上の缺陷があるんだ」

今西氏は遠慮もなく、すばりとさう云つたのである。さう云へば俺の父は……俺の兄は……ひとりには既に死んでゐる。俺の小さい時に死んだのだ。そしてひとりは今寝てゐる。三年來病床に就いてゐる。俺の眼にもそれは……

彼の心は晦くなつた。

兄の病氣の起り始めた當初、兄を慰めてやりたい一心から、兄の氣分を明るくしてやりたい一念から、兄の機嫌のいゝ日を見計らつて、彼はよく麗らかな郊外へ散歩に連れ出したことがあつた。彼は今その日の事を思ひ出した。

兄はおとなしかつた。殊に、平次郎と一緒にだとおとなしかつた。黙つてにやりにやりしながら彼と肩をならべ、或は彼の後について歩いて來た。さうした兄の悦ばしい何んの屈托もなければ惱みもないらしい朗らかな微笑は、どんなにまた彼れ自身を悦ばせたらう。彼はいつの間にか涙ぐんでさへゐる自分に氣がついた。……これで兄の

病氣も追々によくなるだらう。なに、よくしずくに置くものか。俺の力で必ずよくしてみせる。——雄々しくも彼はかう決心したのだ。

が、兄の無邪氣な悦びに輝いたその眼も、若い夫婦づれとか、或は、男と女との樂しげな微笑を交しながら手を運ねて散歩にでも來るのと出逢ふと、忽ちに變つて狂ひ出した。最初——動物の發するやうなへんな唸り聲を喉のところに詰まらしてゐたかと思ふと、それが忽ちに譯けの分らない叫び聲となり、彼の手を腕ぎ放して、走り出すのだ。どこへでも走つてゆく。時には、猛然とした勢ひで男女二人連れに打つてかゝる氣勢を示すこともあるし、時には、悲鳴ともつかない叫び聲を發しつゝさうした二人連れから背を反けて走り出すのだ。早い。まるで飛鳥のやうな速さで走つてゆく足元の定まらない、どこか怪しげな走り様ではあるが、それがまるく風に吹かれる木の葉のやうにひらひら……ふらふらと走つて行くのだ。彼はそれを追はなければなら

ない。そして、捕まへなければならぬ。まるで子供が蝶を追ふやうに、狂った兄の後ろを追ふのだ。

やがて、彼は狂った兄を捕まへる。そしていろ／＼になだめ、すかして、そして更に人のゐない郊外の方へ連れて行つたり、時には、そのまゝ家へ連れ戻すのだ。……兄のさうした狂ひ方に落ちて行つた徑路が薄々ながら彼に分るやうな気がした。父の死後、母と番頭の倉吉との間に起つた忌まはしい關係——それがどんなに感じ易い、狂ひ易い、兄の頭に影響したかは殆ど想像の他であつた。今にして思へば、あの忌むべく憎むべき母と倉吉との關係を猫のやうな敏感さで、兄は嗅ぎ廻てゐたやうであるそれがよし、自分に取つて何んらの足しにも得にもならなかつたにせよ、さうせずには居られなかつたらしい様子であつた。兄の頭には知らず識らずの内に、その嫌惡すべき事實の材料が積み重ねられて行つたらしい。ところが、それが端しなくも今にな

つて、その時の感情がそれとは何んの關係もない男と女との連れを見た時に爆發するのだ。それで、或る時は憎惡するの餘り飛びかゝつて打ちのめさうとする氣勢を示しまた或る時は、嫌惡するの餘りそれから眼を反らし、逃げ去らうとするのだ。

平次郎は嘗てそれをも、事實と事實に對する自分の感想を今西氏の前に打ち明けたのだ。今西氏に取つてそれは明からに、自説に對する事實の裏書を得たやうなものだつた。彼は如何にも自信のあるらしい會心の微笑を口邊に漂はしながら云つたのだ。「小森君、君は氣をつけないぢやいけませんよ。それは、停滞し、濁り切つた血の腐爛しかゝつた現象です。君の兄さんが既に今君の云はれた通りの状態でせう。そしてお父さんが……何んでしたね、矢張り、その、精神的の……なんで亡くなつたんでしたね。……氣をつけないぢやいけませんよ」

さう云はれるまでもなく、平次郎の心は益々晦くならずにはゐなかつた。

俺にもいつ父の運命が廻り合はせて来ないとも限らない。兄の運命が同じやうに自分の上にやつて来ないとは限らない——と云ふ不安であつた。が、疑へば疑へる徴候は彼の上にも既にあつたのだ。小さい時——十四五ぐらゐの時のやうに記憶する。幾日間ぐらゐであつたか、茫然自意識を失くして了つて、自分の過去を埋めて来た時間内に於てそこだけ闇黒の大きな穴を明けてゐるのだ。その闇黒の時間が自分に取つてどういふ生活であつたか、自分がどんな事をしてゐたか——ふとした話のはづみに母の口が偶然そこに觸れて來ることがある。「何しろお父さんがあんな風な亡くなり方をして間もなくだらう。そこへ持て來て平次郎がまた……」

その瞬間、愕然として母は口を喋り、平次郎は顔を反けて了ふのだ。彼の病的な神經の鋭敏さは、母がそこで何を云はうとしてゐるかを直感して、自分に對し、母に對し血統に對し、何もかもに對して、極度の憎悪を爆發させるのだ。……馬鹿女奴！

喋るに事を缺いて自分の悴の缺點をべら／＼ひとの前に喋らうとしてやがる！ ちつたア自分の身を愧ぢるがいゝ。——その眼は闇黒の淵に燃える呪咀の焰となつて、母に向けられるのだ。と、母は母でまた極度に、平次郎が彼の闇黒時代に於ける話を嫌つてゐる事を知つてゐるに拘らず、遂ひ喋り出さうとした自分の迂濶さに對して泣かればかりの眼をして平次郎に許しを乞ふのだ。そして、誤間化して了はうとするのだ。「平次郎と來たらそりや生れた時から痺弱ふござんしてね……それが到頭十四五ぐらゐになつた時、ひどい腦……いえ、何んとか云ひましたね……さう、さう、ひどい氣管支カタルをやりましてね、もう少しで……」

何を餘計なことをつべこべ云つてゐるんです！——彼はぶつと頬をふくらまして、さう云つた眼で母を睨み据ゑ、引つ込んで了ふのだ。それで、その場は兎も角それで済むのであるが、あとがいけなかつた。いつも喧嘩になるのだ。そして、家を飛び出

して了ふのだ。どこをどうと云ふ當てもなく、まるで夢遊病者のやうにふら／＼歩き廻り、或る晩はお寺の縁の下にもぐり込み、また或る時は、公園のベンチに夜を明かし、一三日、或は四五日してからふらつと母の家に歸つてゆくのだ。

その間何を喰ひ、何を考へてゐたか——その時の事を矢張り今西氏に話した時、さうした質問を受けて彼はぎやふんとして答へに行き詰まつたのである。俺はその時何を喰つてたらう？ 何を考へてゐたらう？ ——彼には思ひ出せないのだ。併かも、家を飛び出した時の氣持までが茫乎とした霞の彼方に距てられたやうに、少しも思ひ出せないし、分らないのだ。

で、その時彼はにや／＼とした譯けの分らない微笑を洩らし、今西氏の眼にはち／＼とした瞬きを送りながら云つたのである。

「さうしてる間つてものは腹が減つたんだか減らないんだか、それとも何か喰べてる

んだか喰べないんだか、まるで記憶がないんです。……考へてみるのにどうも減らないやうにも思はれるんですが……」

が、それは兎に角、二三日、或は四五日、喰ふものも喰はず、野宿なんかまでしてふらふらしてゐた自身にふと氣がつくと、そして、蒼浪とした自分の姿を顧みると、彼は急に、家へ歸らなけりや——と思ひつくのだ。が、それにしても、意識を取り戻した後になつてみると流石に極りが悪がつた。その爲めに彼はわさ／＼今西氏のところまで行き、今西氏を煩はして、自分の家へまで送り込んで貰つたのである。

今西の奴、そんな事から俺を精神病扱ひにしてるのかも知れない。——ふと、彼の頭に浮んだことだつた。だがいゝ、今西氏が何んと云はうと、この「減びゆく人々」を讀めば分ることだ。——彼はちらつと懐中の原稿を引き出して見て、そのまゝ再び中へ押し込んだ。——俺が如何に精神が健全で、幻覺の女などに苦しめられてるので

ない、實在の女に戀し、その女の親達から苦しめられてゐるのだと云ふことが分る筈だ、兎に角……

車内が急にさわめき出した。乗客達は一齊に立上つて、一方から一方へと歩き始めた。電車はいつか、終點のSに着いてゐたのである。

三

今西氏は留守だつた。

「生憎もう少し先つき出かきまして……」夫人はさう云ひながら奥から出て來たのだが、その夫人の口吻から、そして顔付から、彼は本當は今西氏が留守ではなくて二階の書齋で切々と、一幕物か何んかを書いてゐるのであらうことを直覺した。

「あ、さうですか」平次郎は如何にも残念さうに、夫人の眼に見入りながら云つた。

「實はこの……」

併し、彼はさう云ひかけて取り出しかけた懐ろの原稿を再び奥深く押し込んだ。これは夫人などに読ませるべきではない。直接今西氏に渡して読まさせなければならぬ。そして今西氏の蒙を啓き、覺ませなければならぬ。彼は誤信してゐるのだ、人間一匹見損つてゐるのだ。

「何か御用でしたら……」

ちつと考へ込んでゐる平次郎を、夫人はにや／＼しながら見おろして云つた。兩頬に出來た夫人の鬢は彼を惹きつけた。三人の子の母とは思へない若さが……美しさが……殊に、一番終ひの子は、遂ひ十日ばかり前に産んだと云ふのではなかつたか。幾らか肉の落ちた頬は、そして血の氣の沈んだ青白さは、そこにうすべにを刷いたやうな紅さへ添えて、これまでののでつくり肥え太つた夫人より幾層倍か若々しく、そし

て美しくさへして見せてゐる。

赤坊を産むと容色が衰へると云ふのに……そして、それあるが故に、或る女達は子供を生むのを嫌やがると云ふのに——彼は不思議な心持で夫人を眺めた。

「奥さんは大層綺麗にお成んなすつた！」

口まで出かかつた言葉を、彼の理性は慌てて押し返した。そしてぼつと顔を赧くして下を向いて了つた。

「何をさうもじく見てらつしやるの？」

平次郎の、日に焦けた黒い襟首に向つて揶揄するやうな微笑を含んだ夫人の言葉が浴びせられた。

「えゝ？……いや、何んでもないんです。今西さん、何時頃お歸りになるでせう。……實は一寸用事があつて……」

彼は慌てゝ云ひ譯けするやうに云つた。今はもう顔を上げることも出来なかつた。が、さう云ふ間にも、彼はとんとんと……と二階から今西氏が降りて来て「やア小森君か。君ならいゝ。さア、上りたまへ！」と云ふ言葉が自分に向つて掛けられさうに思はれてならなかつたのだ。

「さア、何時頃歸りますか、……どこへ行くとも云はずに出て行つたんで少しも分りませんが……」

夫人の答へは冷めたかつた。飽くまでこの玄關先から追つ拂つて了ふつもりらしい。兎に角それはいつもの夫人の態度ではない。いつもの夫人なら、萬更知らぬ間柄でもない自分にかうまで冷淡な筈はない。「兎に角上つて待つてらつしやい。そのうち歸つて來ませうから」ぐらゐの事は云ふ夫人だ。また、これまでもただたびさう云つてくれた夫人だ。それが何んだ、この冷めたさは。——

彼は憤然として、併し、顔には微笑さへ浮べて、ひよつこり頭を下げ、云つた。

「ではそのうちまた伺ひます。どうかよろしく……」

腐つたやうな小さなくよりの門を出ると、彼は急に腹の減つてゐる自分に気がついた。今西さんここで晝飯にありつかう。——意識の下に押しすくめられてゐた考へが、この時むくむくと頭を擡げて来て平次郎の顔をしかめさせ、苦笑を浮ばせた。

松子に似てゐる。實によく似てゐる。——ふと、彼は思つた。似てゐると思ふと、どこもかもが似てゐるやうに思はれて来た。女つて凡てあんなものかしら？ とさへ思つた。

彼は帽子を取つて額に汗を拭つた。風は、久しく掃けづらない彼の髪をぼろぼろと頭の上に立ち騒がせた。ばかりでなく、七八分も延びたらうか、額に生えたその不精麤の尖端を擦るやうに掠め過ぎた。風の音は、夫人の影像をも、松子の影像をも、凡て

を彼の頭から煙よりも無難作に吹き拂つて了つた。同時に、何か眼に見えない恐ろしいものが執念く自分の後を附き纏つてゐるやうな、或る漠然とした恐怖が彼の心に芽を吹いた。焼けたよれた銅板のやうな赤い雲の走る空を見ても、または、耳に這入る風の音にしても、恐ろしいものはその凡てのものの影に隠れて、彼を怯やかし始めた。彼はその恐ろしいものは影を眼に見るやうに、そしてその影を避けるやうに、絶へず自分の前後左右に、ぎろ／＼した眼を光らした。

どこへ行かう？ どこへ行つたらこの理由のない恐怖から遁れられるだらう？——

その恐怖は理由がないだけに始末が悪かつた。どうにも振り拂ひやうがなかつた。根據のある恐怖ならばその根本を突き究め、取り除きさへすれば、どうにか一掃出來ないことはないだらう。だが、こいつ許りは……

彼は依然として不安定な、鋭い眼をきらきら自分の周圍に放射させながら、目まぐ

るしい街頭に立つて人の往來を眺めた。二本の角を持った電車が走り、兜虫のやうな自動車疾走してゐる。と思ふとまた蟻のやうな氣忙しげな歩みを運んで、人間共が石往左往してゐる。……幼年時代に見た鐵道馬車の幻影がふと彼の網膜を過つた。と見る間に、二頭立ての鐵道馬車は一瞬の間に馬の姿がどこかへ消し飛んで、箱車だけがぎいぎい快速力で走つてゐる。併かも、その箱車の上には奇怪極まる二本の角が生えて、そこからはパチパチ火花を發して忽ちの内に遠く埃りの中に見へなくなつて了ふ。それらの中をまた黒く塗つたのや、青く塗つたのや、蝦茶に塗つたのや、種々様々の箱が消魂しい警笛を鳴らしながら疾走してゐる。

平次郎は思はず眼に入つた一本の街路樹に向つて飛びついた。頭の中がくらくらつと渦を巻いて、立つてゐられなくなつたのだ。

眼が廻る。くる／＼廻る。何もかもが……ほう、馬が、人が、自動車が、家が、電

車が……何にもかもが灰色だ、何もない。——彼は夢中で街路樹にしがみつき、眼を閉じた。胸の中が段々落ち着いて來たやうに思つて、吻つと眼を見開いた。それからおづ／＼と自分自身を眺め廻し、更にその眼を周圍に向つて投げつけた。……人々は絶へず一方から一方へ歩いてゐる。その中を依然として自轉車が走り、自動車が飛んでゐる。電車が走つてゐる。人々はどこからか眞黒に集まつて來てはその電車に乗り乗つて了ふとどこかへ運ばれて行つて了ふ。

俺は一體何んだ？ 此處はどこだ？俺は何んの爲めに此處に立つてゐるのだ？——

何もかもが分らない。彼は先つきのまゝ鈴懸の樹にしがみつき、再び眼を閉じた。頭の上ではその葉つばがびう／＼呻つてゐる。ばさばさ鳴りはためいてゐる。……彼は再びぼつかりと眼を開いた。煙のやうな雲がどどん北に向つて走つてゐる。……面白いな。あいつの格好はどうだ、あんなに高く足を揚げてやがる。……ほう、なん

「素張らしい長い足なんだ。あの長さ……あつ、とうとう切れちまつた。あんまり延ばし過ぎるからだ。ふん、また別な奴が出て来やがつたな。また、あんまり圖に乗つて足を延ばし過ぎやがると……ほい、こいつア足がないんだ、頭ばかりでふつ飛んできやがる……あつはははは……」

平次郎の眼はちつと空を睨み詰めてゐる。が、その哄笑の瞬間、鈴懸の樹から手を離すと一散に雲の飛ぶ方向に向つて走り出した。

雲との競争である。

先きの雲が段々北の空……家屋の背後に見へなくなつて了ふと、更に新らしい雲が彼の眼を捉へる。彼は更にそれを相手に、走り出す。……泥濘は飛んで背中から後頭部の方まではねだらけにして了つた。併かも、この間を縫ふやうにして自動車が行き自轉車が飛んでゆく。後から後からと自動車は彼を抜いてゆく。更に、雲の手は嘲笑

するやうに様々に姿を變へ、形を新たにして彼を置き去りにし、更に新らしい次の雲に彼をゆづり渡して走つてゆく。

空の一方を見上げたまま走つてゐる彼の顔は時に笑ひの皺を刻み、時に怒りの相を現し、人々の嗤笑にも氣づかず、矢鱈無性に泥濘を跳ね飛ばしながら突き走つた。

彼は息苦しくなつて來た。先つきから幾度泥濘の中につんのめりさうになつたか知れなかつた。が、様々に姿を變へ、手を振り、足を蹴上げるやうにして走つてゆく雲を見ると彼の胸は跳つた。胸の底を衝いてひとりでに歡聲が湧き上つて來た。彼の口は何かを叫び、眩き、併かも、如何にも苦しさうにせえぜえ呼吸を切らしてゐた。

彼の眼はふと、大きな一つの箱車を見つけた。彼の後から彼を追ひ抜いて來た市街自動車であつた。多勢の人間が蟻のやうに狭い四角の出入口から昇降してゐる。彼は手を揚げてそれに走りつき、とうど動き出した自動車に飛び乗つた。

乗客達の好奇的な視線が、頭の上まで泥濘な跳ね上げた平次郎に向つて注がれ始めた。くすくす云ふ笑ひ聲さへ彼に向つて飛ばされ始めた。が、彼はそんなものに取り合つてはゐなかつた。僅かばかりの空席を見つけると無理に自分のお尻を割り込ませ更にはからだをよぢらせて窓から首を突き出し、空を見上げやうとした。

女車掌が切符を賣りに這入つて來た。皆んな夫々に金入を出し、切符を切らせた。

「Uまで四區……六十錢頂きます」

「Sまで一區……十五錢……」

でつぶり肥へた短身の女車掌は、凡てをてきばきと明快にやつて退けた。彼女は、最後に、窓わくに掴まつて尙も空を走る雲に見入つてゐる平次郎の前に立ち停まり、幾度びか聲を掛けた。

「さア、切符をお切りいたします。切る方はございませんか。……さア早く切らして

「Fps-1」

女車掌の眼も、他の乗客達の眼も今は一樣に怪訝らしい光りを帯びて平次郎一人の上を見守つてゐる。隣りの者は、氣味悪さうにからだをよぢらして一寸でも彼から離れやうとしてゐる。前の者は眞正面から、はねだらけの彼のからだをじろく見上げ見下してゐる、と、この時、彼はじろり眼を車内に返して女車掌を見詰めた。白い眼が光つた。

何をべちやくちや喋つてるんだ。くそ八釜しい——氣むづかしい、併かも狐につまゝれたやうな怪しく光る平次郎の眼に睨み据へられて、女車掌は顔色を變へて仰山な身振りと共に自分の席に戻つて行つた。

と、彼はすかさず彼女の後ろ姿に向つて浴びせかけた。

「ばかつ、なぜもつと早く走らせねんだ、ぐづぐづしてる間に皆んな行つちまふぢや

ねえか。おい、早くだ早くだ！」

さう云つたかと思ふと今度はまるで子供がするやうに兩脚をばたくさせ、如何にも焦れつたさうに唇を噛みしめ、再びくるつと頸をぬち向けていきなり窓から外に首を突き出した。と、その瞬間であつた、呀っ！ と呻くやうに叫ぶと、彼は顔色を變へて窓枠にしがみつき、喰ひ入るやうに窓外に起つた光景に見入つた。

彼は眼を疑つた。……夢ぢやないかな。白晝の夢……いや、それとも今西氏の云ふ幻覺かな。瓦が飛ぶ、さらさら……さらつと一齊に瓦が落ちて来る、眞つ四角に立つた、がつしりした建物が前後左右に激しく首を振つてゐる、と、見る間もなく、堅牢さうな煉瓦壁にびりびりつと龜裂が入つた、あッ！と云ふ隙もなく、その龜裂がぱくつと大きな口を開いた。と、端の方からぐわら／＼つと崩れ落ちて来て、赤黄色い煙りはぱ／＼つとその龜裂も、大きな口も、何もかもを呑み込んで了つた。

自動車は走つた、走つてる間に何回か、空中に投げ上げられ、地上に叩きつけられた。どんな凸凹道を走つてゐる時にも嘗てなかつた現象であつた。自動車は次ぎ次ぎと有り得べからざる——嘗て誰人に依つても想像されなかつたやうな光景に見舞はれつゝ疾走した。……濛々と舞ひ立つた埃、土煙りの中から悲鳴が聞へる。が、自動車の爆音はその凡ての響音を消して了ふ。

一體これはどうしたんだ！ 何事が起つたんだ！——眼の芯から何ものか、放射されるやうだ。痛む。彼は更に眼をばち／＼やりながら外の光景に見入つた。……いや、これは俺の頭のせいだ。頭がへんになつたんだ。それでなくてどうしてこんな光景が、この現實の世界で見られるものか。現實の……さうだ、吾々の棲む現實の世界と云ふものはもつと物理學的な、數學的、四角四面な、そして規丁面なものなんだ。どうしてこんな未來派の繪か彫刻を見るやうな、歪になつたり、三十度も傾いたりし

た家があるもんぢやアない、だいち、あの恐怖に充ちた群集の面を見ろ！ どれ一つ
温かい、赤い血の通つた、満足のなんてありやしないぢやないか。蒼ざめた、深海の
動物をでも地上に擲ひ上げたやうななくにや／＼した格好をして、へたばかりかかつてゐ
るではないか。それがどれもこれも皆、泣くにも泣けない、怒れもされない、と云つ
たやうなおど／＼した眼を上げて、各々の飛びして來た家の家根を見上げてゐるでは
ないか。そして、或る者は潰れた家の家根の下を見詰めてゐる。唇が白くなつて、ぶ
るぶる顫えてゐる。

俺は頭を落ちつけなくてはいけない。たしかに頭がへんになつたんだ。そしてこの
變調はたしかに俺の藝術から來てゐる。——それは電光にも等しい、ほんの束の間に
彼の頭を掠めた自己解剖であり、自己批判である。

……現代の日本の文學は餘りに現實主義に重きを置き過ぎてゐる。寫實萬能を事と

してゐる。現實とは何んだ！ ビール箱の陳列を云ふのか？ 見ろ！ ビール箱は崩れ
た。素張らしい埃り……音響……いや、あれは建物だ？ ふむ、さうだ、自然性をため
られた家畜共を入れて置く檻……いや、建物だ、その家畜共のくだらない生活……い
や、舊道德だ、新道德だ……愛國主義だ、非軍國主義だ……いや、さうぢやない、ブ
ルチョアだ、プロレタリアだ……

へつへへ……

平次郎の唇が動いた。遂に、ぶつと吹き出して了つた。何が何んだか無暗におかし
くなつて來たのだ。

家畜共が何を囀る！ 藝術がそんなものの描寫に終つてたまるかい。新らしい世界
の創造だ。今まであつたものを破壊しろ。何もかもぶち壊せ！ それが俺達の創造だ

……

平次郎の胸は爆發したやうに叫び出した。が、この時はもう車内では誰れ一人彼に注目する者はなかつた。どれもこれもが皆んな唇の色を變へ、顔面筋肉を硬直させたまゝ窓の外に見入つてゐる。

これこそ未來派の藝術だ！ 有り得べからざる事と信じてゐた世界の創造だ！ それこそ一生かゝつても凡人共の味到し得なかつた世界だ！ だがそれにしても……

彼は周圍を見廻した。ぎよろつと光る白い眼が端から端まで車内を撫で廻した。……だがそれにしてもこの凡人共に、俺がいま経験してゐるこの破天荒な内面生活を覗ふことが分來るだらうか。憫れむべき彼等凡人には、この生きた、永遠に風雨に曝らされてぼろぼろに朽ちて了ふまで立つてゐるだらうと思はれる建物が、こつくりこつくり首を振り、からだを顛はし、崩れる世界を見ることが出來やうか。……が、見たところ、彼等もどうやうこの俺と同じものを認め得たらしい。顔色を變へ、唇をぶる／＼

させてゐる様子で知れる。……が、兎に角これで彼等の現實觀は顛倒したらう。あり得べからざる世界が實現したのだ。これが俺の知らうとして知り得なかつた藝術境なんだ。若しこれが俺の幻覺なら、この幻覺は取りも直さず俺の藝術境に對して一の暗示を與へてくれたのだ。

彼が雀躍して低い天井に頭を打ちつけ、顔をしかめた時、先つきまで悠揚として迫らない態度で切符を切つてゐた女車掌が顔色を變へて乗客に歎鳴りかけた。

「皆さんどうぞお降りをお願いします。この先きに火事があつて自動車はもう通れませぬ！」

四

自動車から降された乗客達は一瞬間、困惑し切つた顔をお互ひに見合つて、やがて

急に氣が狂ひ出したもののやうに走り出し、散りはじめた。平次郎も無論その中の一人だつた。が、この時になつてもまだ、何が何やら彼には一切が分らないのである。みんなが走るから俺も走る。——そんな氣持で一寸の間走りゆく人々に歩調を合せてはみたものの、彼の足はまたいつか一つところに停まつて動かなくなつてゐた。いまはもう走つて走つて走り抜いてゐる雲の事も彼の頭にはなかつた。只、表現派の市街が眼前に展開したのを驚異の眼で見守るばかりだつた。

「こゝは一體どこですか」

彼は走り出さうとした一人の男の背に向つて聲を掛けた。同じ自動車から降された仲間の一人だつた。かう訊ねて居る最中にも、彼には自分自身が分らなかつた。

貴様は何者だ！

かう云つてどしんと背中をでもどやしつけられたら、或は自分自身を取り返し得

たかも知れない。が、今はそんな親切な人間も出て來さうには思はれない。皆んなそわ／＼して、泣きつ面をして、散り散りばらばらに駆けつてゆくばかりだ。

どうもはつきりしない。矢張り頭のせいかな。——彼は激しく首を振り、また眼をこすつて眼前に展開した光景に見つた。歪になつたり、三十度も傾いたり、或は崩れたり、潰れたり……さうした家々が赤黄色い煙塵に包まれて、見へ隠れに浮動してゐる。先つき見た通りの光景だ。が、いくら首を振つて見ても……振つてゐる最中に彼はふと一生懸命に首を振つて何かを考へ出さうとしてゐる自分自身を意識して、ぶつと吹き出して了つた。こいつ氣が狂つたんではないかと思つて心配してやがるんだ。——彼の眼は、先つき女車掌の云つた通り行手の方に焰々と渦巻き、燃え上つてゐる火の手を見た。赤黒い煙りが濛々と燃えひろがり、風に煽られて低く地を這つてゐる。ごうごう唸つてゐる火の音までが聞へて來る。

「こゝは一體どこですか？」

彼は再びさう云つて同じことを聞いた。と走りかけたその男はふとその聲に後ろを振り返つたが急に氣むづかしい顔をして走り去つて了つた。自動車に乗つてゐる間中と云ふもの絶へずへんな眼つきをし、わけの分らない事を呟き、嗚り、切符も買はずに窓の外ばかり眺めてゐた男であることに氣がついて急に氣味悪さを感じ出したものらしい。物をも云はずに彼に背を向け、とつと走り去つて了つたのだ。

彼はぼかんとしてそれを見送つた。自分ひとり置いて皆んなどこかへ行つて了ふ——彼は急に淋しくなつて來た。人間は澤山居る。蜂の巢をつつき壊したやうに無數に口々に何かを叫び、喚き、泣き、そして、走り廻つてゐる。が、そのどれ一つとして、彼に取つては關りのない、没交渉の人間でないものはない。荷物を擔ぎ出す者……そいつを持つて走り出す者……煙塵の中を死にもの狂ひになつて騒いでゐる。

半鐘が鳴り始めた。いや、それは先きから鳴りつゞけてゐたものかもしれない。

ジャンジャンジャンジャン……………

一つ、二つ、三つ……彼はその數を數へた。が、途中で投げ捨て、了つた。餘りにひつきりなしに消魂しく鳴りつゞけたから。

土煙りの中から、崩れた家根の下から、氣味の悪い叫び聲が斷續して響いて來る。たすけてくれ……たすけて……

街路はもういつばい人で埋まつてゐる。人間の河だ。それがどどん一方へ、煙りに追はれて走つてゆく。誰れひとり、煙の中からの、家根の下からの……いや、大地の底からの呻き聲に耳を藉すものはない。

彼は幾度びか人の流れの中に巻き込まれやうとした。その度びに胸を小突かれ、肩を叩かれ、足を踏まれた。人の流れは、或るところでは激し、矢のやうに奔り、渦を

巻き、辻々では怒濤のやうに激しく揉み合つてゐる。

彼は遂にその流れに巻き込まれて了つた。彼が動き出すその背後から、消防の自動車ポンプが素張らしい警鈴と共に飛んで行つた。威かめしい兇をかぶつた人間が、屹つとした眼を前庭の下から覗かせて前方を見詰めてゐた。彼はそれを見送つた。足がむづ／＼して來た。瞬間、彼はひよろ／＼と何かに足を掬はれるやうな氣味悪い動搖を感じた。

眩暈……大きな地震だな――

彼は突嗟に大地に四つ這ひになつて蹲くまつた。が動搖は止まらない。眼の下の大地がくらく／＼渦を巻いてゐる。またしても、獸の唸りのやうな悲鳴が地の底から、湧き上り、いつばいに擴がつて行つた。それは痛々しく彼の耳を打つた。

彼は首を起し、眼を上げた。大きな時計の塔が眼の前に聳へてゐる。三階建ての時

計屋だ。その三階の上の塔がいまがづくりがづくり首を振つてゐるところだ。周り中の家からさらさら瓦が落ちて來る。壁が落ちて來る。悲鳴はその瓦の下を飛び出して來る人々の口からも叫ばれてゐるのだ。

彼はよろめく足を踏みしめて立上つた。とその時である。その時までゆらく／＼首を振つてゐた大時計の塔が素張らしい響音を立て、彼の眼の前に崩れ落ちて來た。ばあつと立昇つた赤い土煙りが、黒い物體を包んで彼の眼を掠めた。潰れたな――と思つた時、彼の眼は眩んでゐた。赤い土煙りは彼の頭でまで炸裂したやうだつた。併し、よろ／＼しながらも彼はその時再び夢中で走り出した。

彼の眼は何も見はしない。耳は何も聞かない。彼の眼にはいま焼きつけられたやうに崩れる塔があり、耳にはいつまでもいつまでもその崩れる瞬間の響音と、人々の悲鳴が封じ込まれてゐる。……彼は走つた。が、それらの幻影はどこまでも彼に嚙りつ

き、放さうとしなかつた。

「危ない危ない！ 馬鹿！ そつちへ逃げちや危ない！」

彼の耳は臙氣ながらさうした聲を聞いた。併かも聞くより早く、強い衝撃を肩の邊に感じた。彼は前のめりにとつとつと泳ぎ出し、やがて地上にはつたり倒れた、倒れた眼を素早く後ろに振り向けた。白い服を着たものが、眼を血走らして立つてゐる。巡査であつた。

「早く逃げる！ NからSはもう一面の火の海だ。早く、早く、早くHへ行け！」

茫乎とした白い姿が聲を濁らして叫んでゐる。土埃りか、それとも雲か——と思つてゐたのが、今は明らかに濛々とした火の煙りとなつて、折柄の南風に煽られ舐めるやうに低く地を這つて来る。……今まで気がつかかなかつたのだ。肩を叩かれて、ぶつ倒れて、気がついた時には既にこの火、この煙だ、煙はつんつん鼻を刺戟し始め

た。

「こゝはどこです？ Hはどこつちです？」

顔をしかめ、泥土を拂ひ落しながら立ち上つた時はもう白い巡査の姿は見へなかつた。群集と一緒にどんどん走つてゆく後姿を見るばかりだつた。火の手は意外の近くからも上つたらしい。煙はむせつ返る程濃く、渦を巻きつゝ吹きつけて来る。

今はもう半鐘も鳴つてゐない。自動車ポンプも走らない。人々は、大人も小供も、只、風呂敷包みを肩から斜めに背負ひ、手を引き連れ、何かを叫びつゝどん／＼煙と一緒に走つてゐる。

彼はその後を追つた。いや、あとからあとからと續くその人波の中に揉まれ込んで走つた。こゝは一體どこなのだか、Hはどこつちなのだか、一切が分らない。只、夢中で、皆んなの眞似をして走つてゐるのだ。ばかりでなく、自分は一體何んの用事があ

つて家を飛び出し、どこへ行かうとしてゐたのか、それすらが今だに思ひ出せないのだ。

西から東へ走る人間、南から北へ流れる人間……その人間と人間との群が至るところで衝突する。足は動かなくなつて肩と肩とで揉み合ふ。泣く者、喚く者、罵る者……騒然とした響音が彼の頭をむちやくちやに搔き廻す。……大きな團體をした自動車が行來に横たはり、馬力が進みかねて停まつてゐる。人々はその馬の腹の下を手をつなぎ合つてくより、はつとしたやうに振り返つて見て、そのまゝどこかへ揉まれ揉まれて行つて了ふ。

彼はふと、その雑沓の中に停まつてゐる電車を見付けていきなり飛び乗つた。

どこかへ行くだらう。——さう思つたのである。が、彼は忽ちに、先つき姿を見失つた巡査の爲めに引き摺り降されて了つた。

「そんなものへ乗つてどうする！ 馬鹿な！ 停電でもう先つきから動かないんだ。愚圖愚圖してると焼き殺されちまふぞ！」

彼は立ち上りながら車内を見廻した。自分の他、誰れひとり乗つてゐる者はなかつた。この群集の雑沓する中にあつて何んとなく頼りない寂しさが充ち満ちてゐた。……電氣はもう來ないのかしら 停電ならいつ電氣が來るか分りやしないぢやないか。電氣さへ來りや、火事の煙ぐらゐが何んだ。雑作なく乗つ切つてしまはれるぢやないか——さうは思つたが併し、巡査の泣き聲とも取れる制止の聲は遂に、彼をからつぽの電車から引き降して了つた。

彼は再び群集の中へまぎれ込んで、走り出した。幾つかの横丁を、彼は人に押されたり押ししたり、揉みに揉んで到頭廣い街路へ押し出された。緑の樹木に蔽はれた一廊が片側を占めてゐる廣い道路であつた。鐵柵を圍らし堂々とした石門が開かれてあつ

た。人の流れはどんどんそこへ流れ込んで行つた。

Hだ。H公園だ。——彼は歡聲を揚げて叫んだ。見覺へがある。見覺へがある。そのこの廣場、芝生、噴水、池、木立……併し、彼がそこへ這入つてそのなつかしい、昨日に變らない風物に接した時、その園内に建てられた料理店——M樓はぶす／＼赤黒い煙りを、その窓々から噴き出してゐた。火事はこゝからも始まつてゐるのだ。雜沓はいやが上に雜沓を加へてゆく。

狭い川幅に激しられた奔流が、急にひろびろとした湖水に落ち込んだやうな感じであつた。が、あとからあとからと流れ込んで来る群集の爲めに身動きも出来ない程、いまはいつばいだつた。

やがて溢れ出すだらう。だが、溢れ出した人達は一體どうするだらう。——彼はぼんやりした頭でそんな事を思つてみた。が、溢れ出す人間の心配よりも、彼にはこれ

だけ澤山の人間がこれまでどこに潜んでゐたのだらう？ と云ふ方が不思議だつた。

彼等は一體どこに潜んでゐたのだ？ まるで地の中からも湧き出すやうな勢ひで増へて来るではないか。菌だ。どう見ても菌だ。見る間に、この街路は彼等の頭で埋まつて了ふ。むくむくむく……至るところから彼等は生え出して来る。そして、このH公園目がけて押し寄せて来る。

湖水のやうたとは云つたが併し、公園の中は「靜温」そのもの、象徴である湖水と云ふ感じはまるでなく、怒濤激する太平洋の面影をさへ現出してゐた。はぐれた連れの名を呼ぶ哀切な叫び……先きを争ふ喧嘩の罵り聲……何もかもが煮えくり返つたやうに渦を巻き、沸騰してゐる。谷底を流れる溪流の噴きのやうでもあれば、岩角に飛沫を揚げて咆哮する怒濤のやうでもある。

平次郎はさうした中をうろ／＼歩き廻つた。飢と渴とは野良犬よりも淺間しく彼の

眼を卑屈にし、人々の舉動に、眼色に、持物に、彼の眼を惹きつけた。……眞つ黒に塊つて何かをしてゐる人々の群に彼は突き當つた。それを掻き分けて彼は下の方から首を突き出した。花岡石の臺を持つた水道の水呑場であつた。水は僅かに、ほんのちよろ／＼としか出てゐなかつた。併かも、飲まうとして待ち構へてゐる人間は限りもない多數であつた。誰れが持つて來て使ひ、そして置いて行つたものか、一つの缺け茶碗が廻り持ちにされ、使はれてゐた。

両手でその花岡石の臺に掴まり、喉をぐびぐび鳴らしながら彼はその缺け茶碗を見詰めた。獲物を睨まへてゐる猫のやうな眼であり、姿整であつた。……はツと思ふ間もなかつた。彼の手は遂に一人の男からその茶碗を奪つてゐた。そして顛へる手で、ちよろ／＼吹き出す水をその茶碗に受け始めた。と、殆ど同時だつた。奪はれた男の手がいきなり平次郎の頬に閃いて、碎けるやうな音を立て、鳴つた。

「けだもの奴！　なんだつて順番を待たねんだ！」

男の手はつゞけさまに彼の頬に閃き、打ち据へた。が、平次郎は茶碗を離さなかつた。てんで見返りもしなかつた。毆られる度びにからだは揺れ、手に持つた茶碗の水がこぼれるのであるが、彼は必死になつてそれにかぶりついてゐた。

男の眼があきれたやうに打つのを止めて平次郎を瞞め始めた。周り中の眼が彼れ一人の上に注がれ始めた。が、彼は平氣だつた。三杯、四杯、五杯……頬を眞赤にしたまゝつゞけさまに呑んだ。呑んで了ふと、彼はそこを離れた。飽氣に取られた眼が、今はもう何も云ふこともせず彼を見送つた。

そこは木蔭であつた。彼は打ちのめされたやうに横になつた。そして無意識に袂へ手をやつて何かを探し始めた。右の袂から左の袂へ……左の袂から右の袂へ……彼は幾度となく同じことを繰り返した。

はツと思ふと彼は立上つた。そして全身に亘つて探し始めた。終ひに懐ろを見た。そこにも何もなかつた。彼は首を傾げ、考へ込んだ。何か入れて来た筈だつたが。そこに入れてあるものが、自分に取つて非常に肝甚なものであるやうな気がしてゐて、そのくせどうしても思ひ出せなかつた。いくら頭を振つて見ても無駄だつた。頭の中はまるでからつぽだつた。

からだはへとへとに疲れ切つてゐながら、そのくせ、その木蔭ではなか／＼眠れなかつた。眼の芯がチカ／＼痛み出して来たが、それでも眠れなかつた。彼は茫然とした眼で、目を遮ぎつてくれてる青葉を見た。今はもう風だけは靜かになりかゝつてゐた。僅かに戦々木の葉を通して、彼は氣味の悪い大きな入道雲を見た。ちつと一つところに靜止してゐながら絶へず、その大きなからだをむく／＼とくねらせてゐる。まるで生き物のやうな感じのする雲である。

五

彼は遂に思ひ出した。懐ろにはこの日、苦心彫琢の經果になる戯曲「滅びゆく人々」を入れて来たことを。そして、今西氏を訪ねて留守を喰つたことを。

別に眠つたやうにも思はなかつたが、それでも幾らか眠つたものらしい。ふと氣がついて見ると、そこらはすっかり黄昏れて暮方の微風が頭の上の木の葉を戦がし、葉の一枚一枚に黒い影をつくつてゐた。寝轉がつてゐた上半身を起すと、彼は袂の中の煙草を探つた。袂は兩方とも空つぽだつた。彼の顔を苦笑が掠めた。今日一日、無意味な東奔西走をつゞけてゐる内に大切な原稿も、煙草も、臺口も、何もかもをなくして了つたことを思ひ出したのである。

青葉の落す影が濃くなるに従つて、空を焦がす焰の色はまた一段と凄味を増し、熾

烈になつて来た。黒い青葉の影は段々赤い影になり、砂利を敷き詰めたやうに流れ込んで来た避難者の顔を眞赤に燃やしはじめた。誰れも彼れもが赤い髪をし、赤い着物を着赤い顔をし、赤い呼吸をし、赤い聲を張り上げて叫んでゐる。小さな子供の泣き叫ぶ聲、大人の喚く聲……それらは再び彼の頭を苛々させ始めた。頭の中にまで火がはいつたやうな感じだつた。

彼は起ち上つて裾を拂つた。じつとりした濕り氣が手に感じられた。彼は自分の頭を恐れた。空一面を焦がす眞赤な火……群集の叫喚……それがどんな方向にこの自分を置いてけぼりにして狂ひ出すか分らない、と云ふ疑虞であつた。……今西氏のところへ行つて、そこを出てそれから今に至るまでの全然自意識を失つた、憑かれたやうな意志の伴はない行動を思ひ浮べると一層この自分自身が恐ろしくなつた。……が、この眞赤な空を見てはちつとしてはゐられなかつた。彼は起き上つて徐々に群集を撮

き分けながら、小高い丘の上に登つて行つた。濠に面した赤煉瓦の大建築が盛んに、その窓々から火を噴き出してゐるのが先づ彼の眼を捉へた。……黒煙と焔ととが纏れ合つて凄まじい唸りを發しながら冲天に吹きつけてゐる。遠く望めば限りがなかつた。一面の火の海だつたから。

自分の家はどうなつたらう？

愕然として彼は自分自身を振り返つた。不意に谷底へでも突き落されたやうな愕きだつた。病氣で寝てゐる兄……それから母、弟……恐ろしい死の淵が眼の前に湧き出したやうに、彼はくらくらつと眩暈をさへ感じた。彼は顫える足に力を入れ、屹つと丘の上から自分の家の方向を眺めやつた。

いろ／＼と不吉な場面が想像された。轟然とした響きと一緒に、黒々と立昇る土埃りの中に崩れる自分の家が眼に描かれた。通げる間もなくその場に押し潰されて了つ

たであらう兄、母、弟……惨めなそれらの死に態が實にまさしくと彼の眼に浮んで来た。彼の眼は、胸の中に浮んだそれらの光景をちつと瞞めた。瞞めてゐる内に段々胸の中が苦しくなつて来た。三つの屍體が折り重なつて自分の胸の中に跨がり、壓迫して居る。……はつと気がつくとな彼は我夢者羅に手を振り廻して自分の胸を搔掻つた。終ひには夢中になつて呻き出した。

「皆なくなつたばつちまへー くだばつちまふがいふんだ。滅びる時が来たんだ。小森家の濁つた……ふむ、腐りかゝつた血の總決算する時が来たんだ。天命なんだ！」

だが——彼はぎよつとしたやうに自分自身を見た。——だが、この俺は一體どうしたと云ふんだ。俺ひとりが残つたと云ふのは……

これも天命なんだな。——にやりとし微笑が塑像のやうに硬直した彼の顔を掠めた……俺にはまだしなくちやならない仕事が残されてるんだ。神の撰民なんだ。

人類の爲めに……さうして天國の創造の爲めに……ふん、俺は俺の藝術で小森家と同じやうな運命にある日本民族と云ふものを救はなくちやならんのだ。開闢以本三千年の歴史を誇る日本民族の血は、もう自滅を待つばかりに腐りかゝつてゐるんだ。小さな水溜りのやうな極東の小天地に極限されて、停滞して、殿んで……ふん、もうそろ／＼子子の涌く時分ぢやないか。俺は、俺の藝術をもつて滅びゆく日本民族の爲めに血清注射をしてやるんだ。これが神の意志なんだ。だからこそ神は俺一人を残して……ぶるぶるつと彼は身顛ひをした。彼は默然として丘の上に立ち、天を焦がす火の手を見やつた。前を見ても後を見ても、また右を見ても、左を見ても、火の手は遠く近く、高く低く、四方に渦を巻き、天に沖し、凄絶の限りを盡して亂舞してゐる。

暫くしてから彼はふと我れに歸つた。——俺は今何を思つてゐたんだ。俺は家へ歸らなければならぬ。兄の先途を見届けなければならぬ。母の……弟の……

彼は一散に丘を走り下ると、どこにそれ程の力があるかと思はれる程の力で人によつかり、人を蹴倒し、丘公園から飛び出した。今はもうまったく日が暮れて、焰の反映のない限りの隈々を黒々と濃い闇を作つてゐた。が、炎々として天を焦がす火の手は、道路を挟んで建ち並ぶ家を赤々照らし出し、右往左往する人々の顔を地獄の繪に見る鬼のやうに赤く染め出してゐた。火事はいま、部分部分の火ではなくて宛然として火の洪水であつた。幾つもの火が纏れ合つて高く空に舞ひ上つたかと思ふと、やがてそれは突如として起る旋風の爲めに腰を折られ、くるくるとつと渦を巻きながら低く地を這ひ舐める。

煙はつんつん彼の鼻を刺した。息も吐けないことがあつた。髪の毛を焦がすやうな異臭がたまらなく彼の胸を悪くした。人間が焼ける匂ひだ。——さう思ふだけで頭がくらくらし、眼が眩ひさうだつた。

兄ばうまく逃げ出せたらうか？ 母か、弟か、誰れか助け出してくれたらうか？

この時またしても兄の事が彼の頭に浮んで来た。——母も弟も、ふだんからあの兄を厄介物のやうに視てはゐなかつたか。あのからだの利かない、弱り切つた兄をそのままにして自分達だけ逃げ出してしまはしなかつたらうか。

そんな馬鹿なことが——

さう思ふ傍から直ぐ打ち消す者があつた。が、それは果して有り得ないことだらうか。よし、さうした意志を持つて、故意に助け出さないのではないとしてからが、がらがつと家が潰れて来る瞬間どうして他を顧みるの暇があらう。如何に肉親とは云ひ條、氣の毒な病氣で寝てゐる兄弟であり、息子であるとは云へ、そして如何に兄を思ひ、息子を思ふの情が切なるものとは云へ、それは到底頼みにならぬことではないだらうか。氣の毒な兄——さう思ふだけで彼は胸が一杯になつて来るのを覺へた。誰

れも願みやうとしない兄を散歩に連れ出した日の事が浮んで来た。兄はたしかに母との番頭との醜關係に氣づいてゐたのだ。そして、その行爲を怒つてゐたのだ。憎んでゐたのだ。そして憎んだまゝ怒つたまゝ……

胸が苦しかつた。それは決して煙のせいばかりでも、走りつゞけてゐるせいばかりでもなかつた。——俺はこの爲めに氣が狂ひはしないがらうか。——走つてゐる間にもこの考へが一番彼を恐れさせた。自分にも當然傳へられてゐるであらうあの父の血……今はどこかに潜んでゐるのであらうが當然何かの機會に爆發しすにはゐないであらうあの恐るべき兄と同じ血……それを思つた瞬間、頭から水をぶっかけられたやうな悪寒を彼は感じた。彼は悚然として足を止め、自分自身を見廻はした。そして自分の頭の確かさを試みる爲めに自分のからだを撫で廻し、自分が今何んの爲めにかうして走つてゐるのか、かうした事になるまでの一日中の出来事を回想した。

俺の頭は少しも狂つちやゐない。確かなもんだ。——安心と共に彼は再び走り出す。

おいつち二、おいつち二……おいつち二、おいつち二……

彼は昂然として掛け聲をかけ、煙の中を突き進んだ、幾度が煙の爲めにむせて、その掛け聲は中斷さんた。喉はひり／＼痛んで来た。が、彼はまるでそれを意識しなかつた。夢中になつて叫びつゞけた。と、この時彼の耳はふと自分の直ぐ後から同じやうに掛け聲をかけながら走つて来る別の聲を聞いた。彼は後ろを振り返つた。……真赤な火を背景に、影のやうに一人の青年が走つ来る。火の反映で顔も着物も眞赤に染まつてゐる。よくまアあの中がくゞつて來られたもんだ。——自分ながら感心する程の火である。見る間に火は後ろを塞いで来る。——おいつちに、おいつちに……青年は念佛でも唱へるやうに呟きながら走つて来る。

彼も走つた。火焰の怒號する中で、二人の掛け聲だけが人間の聲である。と、その時、後ろに凄まじい旋風のがら／＼何かを巻き上げる響を彼は聞いた。はつとして彼は後ろを振り返つた。只、火があるばかりだつた。渦巻いた火が……、その他には何もなかつた。青年の姿も、今まで聞へてゐた掛け聲も……地を這つた黒煙がすつと路面をはなれた時、彼はそれらしい影の路上に横たはつてゐるのを見た。

彼は辛ふじて 公園に走り込んだ、埃と煙と火との爲めに喉がひり／＼痛んだ、彼は水を求めた。が、此處も附近の避難者で足の踏み場もないくらゐ雑沓してゐる。水どころではなかつた。氣の張り詰めてゐるせい、彼は辛くも昏倒を免れ、立つてゐると云ふに過ぎなかつた。只、一事——自分の家を思ふ心が彼の氣を引き立て、ゝゝ併し、公園の高臺に立つて下を見卸した時、彼の家は焼けてゐた。彼の家は直ぐその下であつた。……五六軒隣りにある目標の教會に、いま、火が燃え移るところだつ

た。その高い塔が、風の加減で時々猛火の中からその姿を現はした。今は彼の頭に何もなかつた。恍惚として火に包まれた塔に見入つた。

六

あいつの家も焼けてゐるな——

教會の尖塔を見てゐた平次郎の眼はふと、そこから少し離れた松子の家のあたりをうろついてゐた。

松子——その女こそ「滅びゆく人々」の女主人公になる人物であり、今西氏からは幻覺の女であるとしてその實在を拒絶されてゐるところの存在であつた。見もしないで只、彼が喋つたその女との戀愛事件を基礎に「なアに、松子なんて實際に居る女ぢやないよ、例の君の幻覺さ！」と軽く云つて退けるのだ。今西氏がどういふ根據を持

つてさういふ事を云ふのか、彼にはどうしても腑に落ちなかつた。忌ま／＼しくさへあつた。だが、彼にはこの時どうしてもその女との事件について、今西氏の力を籍りなければならぬことがあつたのだ。で、今西氏の謬見とそれに対する獨斷とを一掃する必要から、馬鹿らしくはあつたが努めて平靜に、論理立てて、事實のままを説明しなければならなかつた。……彼は説明した。

——松子が彼とは一つ町内に棲まつてゐる立石と云ふ仕立屋の娘であること。併かも彼より二つ年上の、今は一度他家へ嫁して出戻り女であること。ばかりでなく、口こそ利いたことはなかつたが女の方でも可なり前から彼に氣のあつたらしいこと。……だが流石に、女の父親が詐欺恐喝取財の名の下に三年もC監獄の飯を喰つて來た男であると云ふことだけは話さなかつた。

が、それにしても、若しこれが今西氏の云ふ通り幻覺の女であるとするならば、彼

はまた何んと云ふ惨めな幻覺を見てゐることだらう。どこに一點彼を惹きつけるに足る美しさがあるだらう。二十七にもなつて併かも出戻り女——これだけでも彼の夢を破るには充分過ぎる材料ではないか。……が、今西氏は云ふのだ。

「君の頭はなか／＼巧妙に創作の筋をつくるね。普通の人間が戀を夢見る場合には出来るだけその対象を美しいものにする。例へばだね……その対象の女を出来るだけ纏織のいゝ若い女にするとか、持參金のある金持の娘にするとか、乃至は、教養があつて美しい感情の持主にするとか……例はまア幾らもあるがね、鬼も角、一般の常識美に訴へてそれに相應する女を空想するもんだ。ところが君のはそれを反對に行つてるのだ。そこがまた、自分自身をも欺くに非常に有効な……つまり巧妙な方法なんだ。つまり、「空想は美はし」と云ふ概念の裏を行つて、非常に醜いものを空想してる内にそれがいつか實感となり、君の幻覺を生む酵母の役目をするのだ。要するに……」

今西つて可なりの詭辯家だと云ふことは聞いてゐたが、これはまた恐ろしいこじつけ方をしたもんだ。——彼は只苦笑するより他なかつた。が、さうして今西氏の云ふ事を馬鹿にする一方、彼の頭の中では密かに今西氏の言葉を噛み味ひ、自分のこれまでの生活行動と引き較べてゐるものがあつた。それはやがて、これまでに幾度となくあつた母親との衝突——その衝突の揚句にふら／＼と家を飛び出し、幾日間かを放心状態でうろつき廻つた末、今西氏を煩はして自分の家へ送り込んで貰つた日の追想に追ひやつた。別の意味の苦笑がにやりにやり彼の面を流れた。今西氏があゝ云ふのも無理はないかな——と云ふ諦めの苦笑である。が、苦笑は更に苦笑を生んだ。過去の追想は彼に取つてさうした苦笑の連続ばかりであつた。

六七年前——今でも多少その傾向があるがその頃が最もひどかつたやうである——青葉の頃から夏、秋の初へかけて彼はいつも、夢遊病者のやうな一種の症状に襲はれ

た。發作的にはあるが、自分自身の行爲を意識しなくなるのである。全然と云ふのではなく、臆気ながら意識はしてゐるのであるがそれが非常に傍觀的になるのである。鬱屈してゐた頭の中が急にふわ／＼とし始めたかと思ふと、もういけない。發作が起つたのである。自分の行爲に對して批判がなくなる。彼は無暗と外を出歩きたくなる。何んの制肘する者もない。……ふらふらつと彼は外へ出る。

机の抽斗からお白粉を取り出し、鏡を取り出し、クリーム、刷毛……いろ／＼なものを取り出して懐ろへねぢ込む。懐ろはごそごそ不恰好にふくれ上る、……生温い微風が彼の顔を撫ぜ、街路樹の青葉が惱ましい唾きを彼の耳に送り、彼の心臓を操る。……往來での出來事、行き違ふ人々……何もかもが彼に取つては無に等しい。彼は何も見ないのだ、よし、彼の眼が見たにしても、彼の頭はそれを意識しないのだ。何んの障害物もない、廣々とした空中を自由に飛翔し、泳ぎ廻る時のやうな魂の輕快さを

感ずるばかりだ。

が、彼の足は嘗て迷つたことがない。必ず同じ道を通り、同じ建物の前が出る。石と煉瓦でたゞまれた大きな建物である。……トランクを提げたのやバスケットを持つた者、それらが絶へずぞろ／＼と出入りしてゐる。S停車場である。さうした人混みの中を、彼は如何にも自信に充ちた足取りで、併しどこかふら／＼した腰つきをして待合室へ向ふ。と、ベンチに陣取つた澤山の眼が一齊に彼の上に浴びせられる。瞬間彼の足はその入口で停まり、くるくると白眼勝ちの眼を光らして室内を見廻す。が彼の眼は矢張り、自分に浴びせられたその澤山の眼を感じないらしい。何んの躊躇もなく、顔の筋一つ弛めずに室を横切つて一方へ歩いてゆく。そして、一つのベンチの前に立ち停まる。決して他のベンチには行かない。必ず室を斜めに突つ切つた一番隅のところに行く。誰れに決められたともない、その隅を堅く自分専有のベンチと心得てゐるらしい。だから若し、その場所を他の人に依つて占められてゐる時には、その一間ばかり傍まで行つていつまでもいつまでも立つてその人を見てゐる。發車の時間が来て、その人が立つて了ふまで睨めてゐる。時に依つては、發車の時間が來ない前に、睨み据へられてる人は如何にも氣味悪さうにそこを立つて、他の場所に位置を換へて了ふ。と、彼はする／＼とその跡へすべり込むやうに腰を落ちつける。そしてくるつと後ろ向きになる。

澤山の眼は依然として彼に向けられてゐる。如何にも氣味悪さうに、好奇の眼を輝やかして見てゐる。が、彼の眼は少しもそれを感じない。まるで自分ひとりの室に居る時のやうな落ち着きさをもつて、こそ／＼懐ろのものを取り出す、そして、づらつとベンチの上に並べる。

彼は化粧をはじめなのだ。……先づ瓶を手に取つてその蓋を脱る、そして鼻をそこ

へ持つてゆく。胸いつばい、心ゆくまでその匂ひを胸の中に吸ひ込む。ほつと息して再び吸ひ込む。幾度となく繰り返す、遂には陶然と酔つて了ふ。腹の中から頭の中までがその香氣にむせ返る。やがて、彼はとろ／＼とそれを掌に受け顔に塗り始める。なまめかしい匂ひが油のやうにそこら流れ、埃っぽい空氣に浸み込んでゆく。彼の眼は夢見るやうに室の一隅を凝視める。が、何を見てゐるのでもない。ぼうつと空虚を凝視めてゐる。と、その灰色のもや／＼した空虚の中から何かの影がぼんやりと浮み上つて来る。彼はその影を凝視る、影はだんだんはつきりした形になつて来る。

「おハッ！」

彼の口を低い、愕きの叫び聲が衝いて出た。ある夜の巻島の顔である。巻島の顔がにやりと彼に笑ひかけたのである。巻島——何年前かに別れたまゝ、遂に消息不明になつてゐるその巻島なのである。その巻島は、彼が小學校を出て間もなく這入つたK醫

院の薬局で知り合つた朋輩である。彼より三つ四つ年上の、その時二十才近い青年であつた。

灰色をした空虚の中から、巻島の眼がぎらつと鋭い光を放つて彼を見据へる。

「いま時分何しに來たんだ！」鋭い巻島の眼が些か狼狽を見せながら云ふ。可なり夜更けの薬局であつた。

「何をしに？」——誰も居ないことと許り思つて這入つて來たこの薬局で、思ひもかけない推何に遭つたのである。彼はハツとして自分自身を見廻した。お白粉を塗らうと思つて這入つて來た自分ではなかつたか。彼はどきまぎしながらそのドアに捉まつたまゝ立ち竦んだ。が、その瞬間、幾らか周章て氣味の巻島が益々周章てゝ何かの薬を呑んでゐたのを彼は見たのである。

「おい、這入れよ！」

険しい眼の光りが消えたかと思ふと、巻島はにやりとしながら云つたのである。

「お前もこれを呑んでみる！ 色が白くなるぞ！」

巻島の眼がじろつと、彼の手にしてゐるお白粉の瓶を見ながら云つたのである。

「何んて薬ですか？」彼はおづ／＼と巻島の眼に見入りながら訊いた。

「亜砒酸だ！」巻島ははゞかるやうに聲を低めて云つた。「先生には黙つてゐろ！」

劇薬……色が白くなる……それは妙に彼の心を誘惑した。耳搔一杯ぐらゐの分量である。彼がぶりと水と一緒に呑んだ。心臓が急に調子を高めて、ときどき鼓動を打ちはじめた。……薬のせいかしらん？ と思ふ間もなく、それは平調に復つて行つた。

「お前、毎晩お白粉なんか塗るのか」

が、彼はそれに答へなかつた。巻島の前に僅かに頬を赧らめてうなだれた。

「こんな夜遅くお白粉なんか塗つてどうするんだい、どこかへ行くのか？」

彼は益々深くうなだれた。そして、黙つてゐた。

突然、室の中が暗くなつた。パチンとスキツチを捻る音が、頭の上でした。……呀つ、と低く叫んで顔を起した瞬間、巻島の顔がにやりと下卑た笑ひを浮べながら自分を睨めてゐるのを彼は見た。

彼は、巻島の生温い息吹を頸筋に感じた。

「ね、ね、ね……いゝだらう、え……」

巻島の口が呟くやうに彼の耳の傍で囁いてゐる。

が、彼は答へない。堅くなつたまゝ押し黙つてゐる。……と、巻島の手が、足が、頬のやうにひつこく、からみついて来る。不気味な膚の感触がぶるぶると彼を戦慄させる。……が、聲が立てられない。嫌惡の感情で胸の中が一杯になつてゐる。やが

て、巻島の抱擁から放たれる。

二人は暫くその闇の中に佇立し、聲を恐れるもののやうに押し黙つてゐる。彼は只巻島の荒い呼吸の音を聴くばかりである。と、それから間もなく巻島の手が延びて電燈のスイッチを捻つた。……室の中がぱつと明るくなる。鋭い光線は、白布に附いた汚點のやうに、諸々の醜いものの影を曝らけ出してしふ。見るに耐へられない二つの汚點……彼はするすると闇と一緒に室の外に出た。つゞいて巻島も出て來た。巻島は再び聲を忍がして彼の耳に囁いた。

「おい、先生に喋つちやいけないぞ、黙つてゐろ！」

ばかなツ、何んでこんな事が先生に喋れるもんか。——處女のやうに羞かみながら彼は唯々として點頭き、それを誓つた。

彼は毎日、自分の顔が病的な青白さになつてゆくのを鏡の中に見た。同時に、毎夜

のやうな巻島の荒つぽい抱擁にも慣れて行つた。

「巻島さん！」

さう云つて呼ぶ彼の聲は、その時決して巻島一人のみではなく、男性全體に對して媚びる色に燃えてゐた。併し、彼のその眼は偶爲にも、ある時下女のお君から見られて了つたのである。彼は初めそれを知らなかつた。その秘密を知る者は飽くまでも自分と巻島の二人ぎりだと思つてゐた。ところがさうでなかつた。お君が知つてゐたのである。でつくり肥へた赭ら顔の彼女は、何もかも知り抜いてゐるやうな蔑みの笑ひを浮かべながら云つたのである。

「小森さん、あんた先つき薬局で何をしてたの？……巻島さんとふたりでさ……」

彼は愕然として顔を赧らめ、彼女から顔を反けた。彼は何とも云ふべき言葉を知らなかつた。ぶるぶると鼻が縮み上るやうにさへ感じた。自己嫌惡の情が勃然として彼

の胸を打った。この時程巻島が、そして自分自身が醜く、厭やらしく見へたことはなかつた。

顔を起すと、淫蕩らしいお君の眼がまじまじと自分を賸めてゐるのに彼はぶつかつた。彼は慌て、顔を伏せた。まるで、お君の前に許しを乞ふもののやうに柔順に、口も利けずうな垂れてゐた。彼は彼女の口を恐れたのである。口軽な彼女が、何もかもばつばつと喋つて歩きはしないだらうか、といふ事を。彼は眼に見へないお君の爪を感じた。その爪が鷹のやうに獲物を押さへて離さないものである。と、その時彼はいきなり頭の上で笑ひ出したお君の聲を聞いた。

「おつほほほほ……可愛らしい坊つちやん！」

はつと思ふ間もなかつた。お君の厚い、大きな唇を彼は頸筋に感じたのである。彼は小さくなつて、おど／＼しながらお君の爲すがまゝに任せた。

それから十年経つ。巻島と、お君と、彼と、三人は殆ど同時にR醫院を放逐されて了つたのだ。その後の二人に就いて彼は全然その消息を知らない。

こゝはB停車場の待合室である。平次郎の眼は、先つきからちつと室の一隅を睨んでゐる。そして時々、ざら／＼眼を上げて室内を見廻はしてゐる。併かもその顔は眞白にお白粉が塗られてゐるのだ。

周りに起るくす／＼笑ひ……明らさまな嘲笑——が、彼の耳はそれを聞かないのだ、そして間もなく、その嘲笑に送られてふらふらしながら外へ出て行くのだ。

七

焔の中から時々その黒い姿を隠見させてゐた教會の尖塔は、いつの間にか火の海の中に頽れ込んで了つたらしい。平次郎がふと気がついてそこへ眼をやつた時は、そこ

は怒濤のやうな火が渦巻いてゐる許りだつた。

教會も到頭なくなつて了つた——

彼は呻くやうに低く叫んだ。呪ふべき火は何もかも奪ひつくさずには措かないつもりらしい。生れた時から眼になじみ、何かと云ふとその古錆びた尖塔を瞞めながら物思ひに耽つた、多感な少年時の追憶の對象をまで火は奪つて了つたのだ。信仰からその教會に結びつけられたわけではなかつたが、だから、宗教的には全然無縁の衆生に過ぎなかつた彼ではあつたが、併し、その教會は今では彼に取つて忘れることの出来ないものの一つであつた。……其處こそ、松子との初めての逢引の場所だつたのだ。

茫然としてゐる頂の底に浮び上つて来るものは、さうした松子の影像であり、教會と一緒に焼け死んちまへ——と自棄な呪咀を浴びせかけた兄の顔であり、弟の顔であり、そうして母の顔であつた。

彼等はどうしたらう？　焼け死んちまつたらうか？　それとも、どこかへ避難してゐるだらうか？　——呪咀と憎惡のからみ合つた執拗な感情も、時に、肉親にのみ流れる肉親を思ふ心が浮み上らないではなかつた。焼け死んだと思ふことは耐らなく、彼の胸を苦しめた。恐らくどこかへ避難してゐるだらうと思ふことに依つて僅かに、胸の痛みを忘れることが出来た。併し、さう思ふ心の下からまた直ぐに呪咀の眼が弟の修三の上に向けられ、やがて母に向けられる。……修三の奴は何んだ！　母の姦夫の子ぢやないか。——

修三のみが父の遺傳を受けないで、精神的にも肉體的にも比較的健全で、人並だと云ふことが、同じ兄弟とは云ふものの既に兄の友一や平次郎とはまるで違つてゐた。そこへ持つて来て、寫眞で見る父の顔ともまた少しも似てゐる點がないのである。寫眞で見る父の顔は、友一や平次郎と共通な額の廣い、顴の方へ行く程尖つた鋭角三角形

であるのに比して、弟の修三はそれらの特徴の少しもない、只のまる顔であつた。がさうした面相からばかりでなく、修三が父の子でないと云ふ最も有力な證據は、父が明治三十五年に死んで居るのに、修三の出生が日露戦争の始まつた明治三十七年だと云ふことであつた。……兎に角それは平次郎が六つ七つぐらゐの時の出來事で、今は彼の頭のどこにもその當時の印象はない。非常にぼんやりしたものになつてゐる。併し彼の推察にして若し誤りがなければ、修三の父は、平次郎等の父がまだ盛んに商賣してゐた頃の番頭の、そして今でも小森家に出入りを断たない中村倉吉であることに疑ふ餘地がなかつた。それは、修三と倉吉とが容貌の上から非常に似てゐるばかりではなく、修三に對する倉吉の態度——それから、母の倉吉に對する態度に依つて窮ふことが出來た。

今は二人とも頭の禿げ上つた、そして白くなつた老人達である。が、二人が茶を呑

みながら話しをしてゐるところを見ると、彼の眼はきまつて、二人の顔から皺を抜き取つた若々しい男女の一組にしてさふ。皺枯れた話聲は、生命力の漲つた若々しい喋々喃々として盡きない囁きとして響いて來る。

彼はさうした二人の會話を襖の蔭で聞く。時には、二人の前に姿を現はし、虚心平氣を装つて仲間になり、お茶を飲んだりする。そして、自分の心の苦しさをまぎらす爲めに、二人に對する辯解の辭を考へたりする。……姦夫姦婦だなんてどこに根據があつてさういふ暴言を吐くのだ？先づさう云つた詰問を自分の心に發してみる。……それはお前の邪推に過ぎない。さういふ偏見の眼をもつて見るから、何もかが曲つて見えるのだ。お前の心の邪まな證據だ。基を正しくしないで影ばかり直くしやうとするお前はお前のその邪まな心を一掃しない限り、何もかもが曲つて見へるのを知らないのか？……心の隅でさう云つて答へるものがある。……或はさうかもしれない。――

—彼はさう云つて苦笑を浮べ承認する。そして愈々二人の爲めに辯解の辭を構へてやる。……そんな事は世間にさらにある事です。決してくよくよするには及びません。殊に、二人の間を疑はれる最大の理由と云ふのは、亭主が亡くなつてから二年も経つて修三と云ふ人間が生れたことにあるのでせう。そして、その修三が姦夫と目ざされる倉吉に酷似してゐると云ふことにあるのでせう。が、それはそれでいゝではありませんか。誰れに遠慮も要りません。修三は倉吉の子供に違ひありません——さう仰言りなさい。何しろ亭主に死なれて二年もたつてから出来た子ではありませんか。表面は兎に角、再婚したのだと思へばいゝでせう。なに？ 亭主の生きてゐる内から……はつははは……何を云ふのです。あの病氣ではありませんか、妻に對して良人の義務がつけなければ……ね、さうでせう。はつははは……世間にさらにあることですよ。——

が、いけない。二人の前に居ると平次郎の胸は落ちつかないのである。で、彼は立上つて直ぐ襖の蔭にかくれて了ふ。と云つて、そこを遠く離れて二人の話聲の全然聞へないところへ行つて了ふことが出来ないのである。耳を聳て、神経を鋭くして襖の蔭に立つて居る。……と、いけない。胸の中がむら／＼つとして来る。病氣で寝て居る、併かも自意識を失つてゐる父の前で、母と倉吉とがいちやつき合つて……あゝいけない、いけない。——彼は呻くやうに叫んで頭を押さへ、へなへたと座り込んで了ふ。……電燈を消した後の、或る夜のK醫院藥局の光景が浮み上つて来る。淫らなお君の姿態と、母のそれが段々頭の中で差別がつかなくなつて来る。胸の中をうづ／＼した血が奔流し始める。それがつうつと頭へ上つて行つたかと思ふと、彼は自分で自分が分らなくなる。……いつの間にか、ふら／＼と立ち上つてゐる。彼の眼は、その時實に鮮やかにお君の影像を描き出したのだ。それから同時に巻島の影像をも描き出

したので、彼等の影像を見詰めてゐる内に、彼の眼はにた／＼と二人に向つて微笑みかけてゐる。

彼の眼は、彼の手は、彼の腰は、彼のからだ全體は、無意識の裡に柔かい線をなした媚態を作つてゐる。彼の眼は不思議な輝きをもつて歩き出す。

この時彼は、階段をめき／＼鳴らして二階から下へ降りた自分を意識してないのだ。無論、下駄を突つかけたのも、どこへ行かうとしてゐるのかと云ふことも意識しない。全然意志の働きがないのだ。彼はたゞ、ふら／＼と歩いてゆく。實體のなほ一個の影である。

影は、人通りの烈しい往來を風のやうにふら／＼泳いでゆく。どうやら、S停車場に向つてゐるらしい。その懐ろにはいつの間にか、お白粉が入れられてゐる。鏡が、クリームが、刷毛が……彼の眼はひたすら、お君を追つてゐるのである。頭の中に描

き出されたお君を。――

「小森さん、どこへ行らつしやるの？」

平次郎の耳はその時ふと、さうした聲を聞いた。ぎろつとした眼をその聲の方に向けた。……知らない女が立つてゐる。じろ／＼自分を見据へてゐる。が、知らないと思つたのは瞬間で、その女こそ彼が求めてゐるお君ではないか。

彼はにた／＼とした微笑をもつて、その返事に代へた。と、女も同じやうな微笑をにやつと彼に浴びせかけた。そして、更にたたみかけて云つた。

「散歩？ 小森さんこの頃ちつとも教會へお見へにならないのね。……妾、これから行くところ。あなた行らつしやらない？」

意志のない影は再び、微笑をもつてそれに應へた。そして、その後に踵いて行つた。教會では多勢の若い男や女、それに年寄り達が聲を張り上げて讚美歌を歌つてゐる

それから牧師の讀む聖書を聴き、説教を聴いてゐる。お祈が上げられる。それからまた讚美歌が歌はれる。

夜である。

教會の閉ぢられた後ち、姦淫の罪を説いた牧師は、その口で信者の未亡人を暗い樹蔭に誘ひ接吻を與へ、次の密會の日取りを決めてゐる。——さういふ専らの噂であるその噂を基にして、彼の眼は實にあり／＼とさういふ場景を描き出すのだ。……髭のない如何にも滑めつこさうな顔である。色が白い。そして年が若い。神學校を出て間もなくこの教會の副牧師になつて來た人だと云ふことである。電燈の光りで、顔がてら／＼光つてゐる。クリームだらうか。いや、クリームの上に薄くお白粉を刷いたんだな……いや、あれはお白粉ではない、亞硫酸……いや、いや、まさか……と、その白い顔が、壇の上をちら／＼動き廻つてゐる。そして、口を動かしてゐる。言葉が

……ぼつり、閃光のやうにぼつり、耳に飛び込んで來る。

若い牧師は今、約翰傳のある章句を引證して説教してゐるらしい。

「……爰に奸淫を爲せるとき執へられし婦ありけるが、學者とパリサイの人これを耶蘇の所に曳來り群集の中に置きいひけるは、師よこの婦は奸淫を爲しをる時そのまゝ執へられしものなり、此の如き者を石にて擊殺すべしとモーセ律法の中に命じたり爾は如何に言ふや。……」

こゝまで讀んで、若い牧師はふと聖書から顔を離し、聽集を見廻した。落ち着きを見せた白い顔はその時ちらつと或る一點に惹きつけられ、動かなくなつた。若い未亡人の眼とかち合つたのである。が、牧師の眼はにやりともしない。眞面目くさつて、その説教をつゞける。

「……學者と、パリサイの人違とは事實に即したかうした難問を呈出し、耶蘇さま

の返答如何に依つてはこれを嘲笑したり、或はその時の権力に引き渡さうとしたのであります、ところが、耶蘇さまは黙つて居りました。が、餘りにうるさく責め立てますので、徐ろに顔を起し、彼等を見廻して申しました。「爾等のうち罪なき者まづ彼を石にて撃て」……その權威のある言葉に、そうして道理のある言葉に、そこへ集まつた人々はそこ／＼に立ち去つて了つたのであります。あとには只、耶蘇さまと、姦淫をした女と、たつた二人残つたのであります。……その時、耶蘇さまは立上つて婦に申されたのです。「婦よ、爾を訟へし者は何處に行きしや、爾の罪を定むる者なき乎」……さうして、耶蘇さまはかう云はれたのであります。「我も爾の罪を定めず、往きて再び罪を犯す勿れ」……皆さん……」

牧師の青白い頬に、いくらか赤い血潮がさしてぼつと染めてゐる。聴集の眼は悉くその顔に引き寄せられてゐる。

と、その時、彼の耳はふと女の囁きを聞いたのである。

「あの牧師さん、小森さんとそつくりね、ほんとによく似てるわ」

彼の手と、女の手とは堅く袂の下で握り合はされてゐる。どちらから先き觸れるともなく觸れ合つて、それがぎゆつと握り合はされたのである。教會が閉ぢられて、多勢の若い男や女がこれまた夫々に手をつないで、暗い闇の中に消えてゆく。

「お君さん！」

彼の眼には先つきのまゝ、K醫院の薬局が描かれてゐる。どういふ風にして巻島をすつぽかし、誰にも邪魔されないで逢引が出来るだらうかを考へてゐる。

「何を云つてるのよ！ お君さん、だなんて氣味の悪い、一體誰れか居るの？」

いつか、街燈の光りの届かない暗い樹蔭に二人は這入つてゐる。女のぎよつとしたやうな聲が、彼の意識を蘇らした。

アーク燈の青い光がチカ／＼と樹の葉を洩れて、二人を照らし出した、眩しい光の中で彼はちらつと自分と肩を並べてゐる女を見やつた。が、初めの一瞬間、彼は茫然としての女の横顔と見詰め、やがて弾かれたやうに愕きの聲を揚げて低く叫んだ。

「呀ッ、松子さん……」

彼の頭の中はくるくるつと旋風のやうな烈しい渦を卷いた。お君がいつの間にか松子になつてゐる。松子松子……筋向ひの仕立屋の娘である。……が、今は出戻りの女である。頭の中に起つた動亂はなか／＼静まりさうにない。お君がいつの間に松子になつたのだ？……

「おつほほほ……何をさう愕いてらつしやるの？ お君さんでどんな人？ あんたのいい人？」

酒蛙酒蛙とした女の眼がたゞみかけて追つて来る。が、彼には答へられない。何が

何んだか無我無中なのだ。

いつの間に化けやがつたんだ。……やがて彼は自問した。そして、まじ／＼と女の顔を見詰めた。「あんた、松子さんですね」

「まア、御挨拶ね。……今まで誰れだと思つてなの？」

「誰れつてこともないけれど……」彼は流石に云ひ漣つた。が、さう云つてちらつと女の眼を見た時、彼はまた慌て／＼云ひ直した。「そりや、松子さんてことはちやんと分つてたんだけれど……」

「ふつふふふ……いゝわ、そんな云ひわけ……だけどもへんだわね」

が、さうは云ひながらも、女はどこか怪訝らしい眼を瞬いて、まじ／＼と彼を見詰めてゐる。女の注視に遭つて、へどもとした彼の胸の中は益々混亂を増すばかりである。どうしてかういふ事になつたのだか、彼にはまるで見當がつかなかつた。狐につ

ままれたやうな感じだつた。お君だと許り思つてた女がいつの間にか松子になつてゐるのである。

彼は松子に手を執られたまゝベンチに腰をおろした。アーク燈の光が青白く二人の顔を照らし出した。

「小森さん、この頃どうして教會へゐらつしやらないの？」女の眼がちつと平次郎を見据へた。「妾ね……」

「えゝツ」

彼はびつくりしたやうな聲をして女の青白い顔を見た。いつの間にか女の存在を忘れて、過去の追憶に耽つてゐたのである。いや、女の今の言葉で瞬間に過去を思ひ出したのかも知れない。發作の靜まつて居る時の病兄を連れて、教會の門をくゞつた日の追憶である。どういふ動機からであつたか、偶然聖書を読んで、その聖書の文句に

惹きつけられて教會の門をぐゞるやうになつた。只、それだけのやうである。三年に亘る傳道中、基督は到るところで狂人を癒し、癪病人を潔め、跛者を歩ましてゐる。併かも、信仰に依つて誰でもが救はれる。——彼はそれを讀んだのである。

あの、兄の病氣も癒るだらうか？ 兄に信仰があるだらうか？ それは疑問だが、兎に角行つてみやう。……

それはまだ病氣の初期だつた。發作が起るにしてもさうひどいことはなかつた。いつも鬱々として黙り込んで居ると云ふ風だつた。氣乗りのしないらしい兄の手を執つて彼は時々教會の門をくゞつた。厭や厭やではあつたのだらうが、兄は決して彼の云ふことを拒否しはしなかつた。唯々諾々としてこれに従ふと云ふ風だつた。が、それももう三年も前のことになつたのである。五六回……十回とはくゞらなかつたらう。兄の病氣は段々昂じて來た、遂には人の集まるところへはうつかり連れて出られなく

なつたのである。

その時の彼の姿を、女は教會の中で見たのであらう。「この頃ちつともゐらつしやらないのね」と云ふのである。

女はいつの間にか、彼の手をぎゆつと握りしめてゐる。

「妾ね、随分前から貴方を知つてるのよ」

「僕だつて……」彼はぼつと頬を赧くしながら云つた。狎れ狎れしい女の態度を見ると、氣味が悪かつた、お君だとばかり思ひ込んでゐた今の今までの自分が、あの放心状態の時どんな事をこの女に對してしてゐたか知れないと思ふと、恐ろしいやうな氣さへした。

「ねえ、平ちゃん、どうして急にさう黙り込んでしまつたの？」女の眼が詰るやうに彼を見た。そして、堅く縮かまつてゐる彼の頸へいきなり手をかけて云つた。「さア、

もう一つ……ね、キッスを……」

氣がついてみると、唇や、頬や、額や……どこもかもが女のキッスでべた／＼してゐる。やつと飢えを満たされたやうに、女の額は満足さうに微笑んでゐる。

いけない、いけない、俺は矢つ張り……

後悔しても追つつかなかつた。——俺は矢つ張りあの時お君だと思つて抱きしめるぐらゐの事をしたかも知れない。——

八

青白いアーク燈に照らし出された女の顔を見てゐると、どうしても月光に誘ひ出されて來た妖女とほか見えなかつた。

「ねえ平ちゃん……平ちゃんなんて呼んでもいい？」女は再び彼の顔に接吻し兼ねま

じい勢ひで白い顔を近づけ、囁いた。「もうい、わね、洗禮だつてもう済んだんですもの……」

女は意味ありげにかう彼の耳に囁いたかと思ふと、如何にも大膽に、おつほほほ……と云ふ笑聲を、青白い夜の空氣に響かせながら哄笑した。

彼はぶるぶると顫え上つた。

どうしてこんな事になつたんだらう——

取り返しのつかない事をした、と思ふ程でもなく、彼は相變らず黙り込んだまゝ漠然とそんなことを思つてゐた。彼は頭を激しく振つてみた。へんにもや／＼したものが頭の芯の中で渦巻いてゐた、それあるが爲めに頭がはつきり冴へないやうに思はれた。

俺の頭はまた變調を來し始めたんだ——

只、それだけは感じられた。十何年も前に別れて、別れたまんまになつて居るお君の幻影に誘惑される何んて——併かも、その實體は毎日顔を見合はせて居る松子……あの出戻り女の松子だなんて——思へば思ふ程、彼は自分の頭が信じられなくなつて來た。いまかうして松子だと思つてゐる女の顔が何時どんなものに變つて了ふか分つたもんぢやない。狐にばかされると云ふことがある。が、俺は今その狐にばかされてゐるのかも知れない。——彼はまた頭を激しく振つて、そつと女の顔を覗き込んだ。彼はいつの間にか立ち上つて、水のやうに澄んで青白い空氣を分けて歩き始めた。女の手がしつかり左の手を掴んで離さなかつた。

女は何も知らぬやうな顔をして、相變らず満足さうな微笑を浮べたまゝ歩いてゐるが、その時ふと何かを思ひついたやうに、如何にも眞面目に顔を引き歪めながら、一面、命令するやうな口調で云つた。

「ねえ小森さん、あんた結婚を申し込まなくちゃいけないわ。……どなたかお友達があるでせう。誰でもいいわ。そのお友達を通して妾のところへ……ね、冗談ぢやないのよ、何んしろこんな関係になつちまつたんですもの……」

「ほう、結婚を、ね……」彼はひと事のやうな無感動な調子で答へた。が瞬間、ぴりりと鋭い何かを感じて飛び上つた。女の、鋭い詰責の眼である。言葉に出さない詰責の言葉である。彼はそれを眼で見た譯ではない。耳で聞いた譯ではない。からだ全體で感じたのである。

ぎよつとしたやうに我に復つた彼は慌てゝ云ひ直した。

「うん、申し込むよ、そりや申し込むさ……友達だつて居るよ。今西さんに頼まう」彼はまるで、女の暗示にかゝつてゐる。……何しろかうした関係がついぢまつたんだから結婚を申し込まなくちゃならない。それは本當だ。——彼は眞面目にさう思ひ

込んで了つたのである。

さう云つて彼はちらつと女の横顔を窺み見た。満足さうな微笑が頬のあたりにびく／＼してゐた。彼はやつと安心の胸を撫でおろした。

「今西さんでどんな人？ 何をしてゐる人なの？……何んだか聞いたやうな、知つてるやうな氣がするんだけど……」

女は小首を傾げながら呟いた。

「今西さんを知らないの？」彼はやつと自分の優越感を取り戻したやうに、胸の高鳴りを聴きながら云つた。「今西さんてば、有名な劇作家だよ、僕は……」

が、彼はどう云つたら今西氏の有名さをこの無知な女に知らせ、併せて、この有名な今西氏と自分とがどんなに親密な友人関係にあるかを説明出来るかと思つて、一寸言葉を切つて口縮つた。が、彼は忽ち胸の底を衝いて出て来る言葉を捉まへ、云つた。

「何しろね、今西さんてば日本の劇文學に獨逸から來た表現派藝術の様式を取り入れて今西氏獨特の表現派藝術を生んだ先覺者なんだ。だから、少し文藝の事に氣をつけてるもんなら今西さんの名を知らない人なんてありやしない。ぼくはその今西さんとこへ始終遊びに行つてるし、今西さんも僕んとこへ時々遊びに来るんだ」

「さうさう、妾も何んか雑誌みたいなものでもその今西さんて人の名を見たのよ。今西雅夫つてんでせう。でも妾達にやあんまり面白くない芝居ね。ごちゃ／＼へんな人間ばかり出て來る馬鹿らしい芝居……たゞ、それだけ覺へてるわ。だけどいゝわ、書くものなんか面白くないつてその人に仲に立つて貰へればね……」

「で、結婚つて云ふ事になるんだね」

まるで他人ごとのやうな氣がしてさう言つたのであるが、併し、彼はその自分の言葉にぎくんとした。口では何んでもないやうにさう云つたが、彼の考へはまだそこま

で行つてなかつたのだ。まるで眞つ暗闇の夜道を歩いてゐる時、突然、堅い岩のやうなものに鼻を突き當てた感じだつた。

「えゝさうよ」女はすましたものだつた。「であんたいつ頃その今西さんに會つて頼むつもり？ 成るべく早い方がいゝわ」

「あゝ、早い方がいゝ」彼の頭は何か別の事を考へてゐたのであるが、その口は矢張り鸚鵡返しにさう云つたのである。

さう云つて了ふと、彼はまた今の考へに撚りを戻して行つた。矢張り、松子の事を考へてゐたのである。……俺はどうしてこの女と結婚の約束を取り結ばなければならぬいやうになつたんだらう？ この女は……さうだ、この女は俺の家の筋向ひへ越して來てから丁度八年になる。八年來毎日顔を見合はせてゐた仲である。が、要するに只それだけだ、俺は嘗てこの女を戀したことがあるか。結婚しやうと思つたことがあ

るか。一度だつてないぢやないか。只、朝晩何んと云ふこともなく二階の窓から顔を見合つて、うなづき合つて、時には顔をにや／＼と笑ひに頼したりして、慌てゝ窓を閉めて……要するに他愛のない、只それだけの間柄だつたのだ。併し……

彼はそこで激しく頭を据つて、過去の思出から記憶の糸を手繰つた。……併し、その時俺は慌てゝ窓を閉めて、頭の中であの女を素つ裸體にして、ある時は踊らせ、ある時は膝の上に載せ、またある時は仰臥させ、窓をチラつと明けて此方を見てゐる女の顔に接吻を投げ、また慌てゝ窓を閉め、さうして……

彼は顔を赧くして追憶の糸を断ち切つた。……俺は果してこの女に對してそんな大きな口が利けたもんだらうか。嘗て戀したことはない。結婚しやうと思つたことはない、なんて……

が、その女はさうした過去の八年間に於て一度自分を捨てゝ他へ片づいたことがあ

るのだ。さうして今は、離縁になつて再び自分の家の筋向ひにある實家へ來てゐるのだ。さうして、物欲しさうな顔をして再びその窓から、依然として元のまゝでゐる自分に何かを求め始めたのだ。

「一度亭主を持つた女がどうしてひとり身でゐられるもんか。あそこの娘だつて屹度何んだよ、いまに……」

今は年老ひて白髪になつた母が、よく窓から往來を見下してゐる松子を見ながら云つた言葉である。が、さう云ふ母が一向平氣なのに對して、彼はばつと顔を赧らめ、障子の蔭に顔を隠して了はずにはゐられなかつた。……母は自分自身の事を云つてるのだ。——さう彼の胸は感じたのだ。……何んと云ふ耻知らずだ。さう彼の眼は云つて、母を責めたのだ。その爲めにこそ、兄は病氣を一層重らして了つたのではないか……が、母は相變らず何も感じないものゝやうに、平氣な顔をして云ふのだ。

「一度亭主を持った女がどうして……」

が、彼は母のその無心の悪口に對してきくんツとしずには居られなかつた。その、ひとり身で居られないと云ふ出戻り女の相手が、今はこの自分ではないか。

「何しろあそこの主人と來たら詐欺取財か何んかで三年も臭い飯を喰べて來たんださうだからね……それを承知であの娘を貰つた人なら兎に角、さうでなかつたらいつか知れずにはゐないからね、大概のもんなら厭やにもならうぢやないか」かう云つた母は、この時尙も言葉をつゞけて云つたのである。「……中にはそりや、親はどんな人間であらうと娘さへ正直でおとなしけりやい」と云ふ人があるかも知れないけれど、親の血つてものは必ず引くもんだからね……」

彼はその時初めて、あの松子の父親が詐欺恐喝取財で監獄に入れられた人間であることを知つたのだ。が、その時彼はそれをさう輕蔑する氣にはなれなかつた。彼の頭は

それを受け入れる餘地がない程、自分の母の過去の身持について惱まされてゐただ。

「ねえ小森さん、何を考へ込んでるの？ いやに黙り込んぢやつたぢやないの」

女の聲が突然、彼を現實に呼び戻した。母の所謂、一度亭主を持った女……ひとり身では居られない女……その女から性慾の對象として撰ばれた自分は何んと云ふお目出たい人間だらう。その女が今必死となつてこの自分を籠絡しやうとかゝつてゐるのではないか。――

この時女は更に口を尖らかして云つた。

「いやに黙り込んぢやつて、一體妾と結婚する意志があるの？ 厭やになつたんで、考へ直さうとでも思つてるの？」

教會からS公園へ——

平次郎と松子とのだら／＼した密會はつゞけられた。女はその度に彼に迫つた。

「小森さん、あんたいつ妾と結婚してくれるつもり？　もう今西さんの方へ頼みに行つて下すつたの？」

「なか／＼行く機會がなくて……だがその内に行くよ」

彼の答はまたいつも判で押したやうにきまつてゐた。が、女の云ふ通り、自分に果して松子と結婚の意志があるのかないのか、それを問ひ詰められると、彼には返答が出来ないのである。母の思惑が彼の意志を鈍らすのだ。で、彼はその終ひに屹度云ひ譯けの言葉をつけ加へることを忘れなかつた。

「何んしろ今西さんと來たら、いま方々の雑誌やら新聞の注文に追はれて馬鹿に忙しがつてるんでね。さういふ用事を頼みに行くのがなんだか氣の毒で……だがその内折りを見て必ず行くよ」

併し彼は、女にはさう云つてゐたのであるが、事實は、最初の密會から二三日して今西氏を訪ねて、一寸その事を頼んでみたのだ。……母の方はどうにでも云ひくるめられる——さう思つてゐたのだ。が、その時彼は殆ど眞面目に相手にもされないで、體よく斷はられてしまつたのだ。

「小森君、君の眼つきはどうもよくありませんね、また病氣が起つて來たんぢやないですか」今西氏は、彼が仲人になつてくれ——と云つた言葉に對して、いきなりさう云つて浴びせかけたのだ。

「君は頭を少し落ちつけなくちやいけない。毎晩女と密會してるなんて、そりや君の

幻覺さ。君の抑壓された性慾本能が再び悶え始めたのだ。活動を始めたのだ。君に今起つてゐる現象を分析すれば……」

今西氏はさう云つてじろく彼の顔を……殊に眼の中を、喰ひ入るやうに見詰め始めたのだ、そして如何にも科學者らしい眞面目くさつた態度で、云ひつゞけたのだ。「兎に角、君の眼はいま非常に女に飢えてゐる。……君は近頃寝てから夢を見ませんか。夢を……夢と云ふ奴が今ちやその人間の心裡を探索する上に非常に役立つんだがな。君が近頃どういふ夢を見るか、その夢の分析に依つて僕は君の病氣をすつぱりと癒せると思ふんだが……」

そうら、フロイドが出て來たフロイドが——彼はにやりとしたぎり答へなかつた。フロイドに依つて何もかも解決しやうとしてゐるのが可笑しく感じられたのだ。……今西さんもそれさへやらなければいゝ人なんだが。——

彼の答へのないのを見て、今西氏はこの時呟くやうに云つた。

「兎に角、君に今現實の女をひとり當てがつてやれば直ぐ、君のその病氣は癒るんだが……そして、幻覺も消えてなくなつちまふんだが……」

今西氏の眞面目くさつた鋭い眼が眩ゆく彼の網膜を刺した。

糞ばか／＼しい、ひとの女をまた幻覺扱ひにしてやがる。——さうは思つたが併し最初の密會の時、女を松子と知らずに十何年前に別れたきりになつてゐるお君だと思ひ込んでふらくと教會に這入り込み、今のやうな關係になつたその原因にまで追駈されると、どう自分を説明してい、かに迷はない譯には行かない。で、彼は成るべくその根本にまで遡ることを避けた。併かも、そこで彼は極力、松子といふ女性が實在の女であることを説明しなければならなかつた。

「兎に角今西さん、一度うちへ見に來て下さい。そりやもう幻覺でも錯覺でも何んで

もない、昔から知つてる女なんですから。……しかも僕のとこの直ぐ筋向ひの家に居る女なんです」

彼が厄氣になつて辯解するその言葉に對して、併し、今西氏は更に自説を枉げない頑強な態度で云つたのである。

「そりや君の家へ行くのは敢て厭はないが、その爲めに行くと云ふのはご免だね。君は女さへ見りやどれこれの容赦はないんだから。……あれが松子だ、いや、これが何子だ——つて、どれもこれも皆んな君の戀人だつてことになつちまふんだからな。……つまり君のは幻覺であり、同時に錯覺なんだ」

今西氏はさう云ひ切つて幾ら辯解しても彼の言葉を耳に入れないのだ。が、これも原因はあるのだ。今西氏がなぜこんなにも頑強に自説を押し通すかと云ふには、それはそれで矢張り、平次郎に取つては弱點……今西氏に取つては有力な材料を握られ

てゐるのだ。——ある友人と連れ立つて日の遊廓に遊びに行つた時の事である。彼が冗談に、その時自分の相方になつたおんが嘗て、自分の知り合の、併かも相思の間柄で肉の關係まであつた女だと云ふことを云つたからであるらしい。そして、その女が厭やになつて振り捨てたにも拘らず、踵け廻されて困つてゐた女だと云ふことを喋つたのが禍ひしてゐるらしい。が、それだけならまだよかつたのに、それを眞に受けた友人が物好きにもおんあの身元調べをやつたのが破綻の初まりだつたのだ。遂ひ最近、この女郎屋へ賣られて来るまで千葉縣のかの片田舎にゐた女だと云ふこと——それを聞き出して、そのいきさつをまた面白可笑しく友人間に吹聴したのがいけなかつた。……今西氏はそれを聞き込んだのだ。そして、それを何より有力の證據であるかのやうに、それを例證して云ふのだ。

「君は女さへ見りやどれこれの容赦はないんだからな、要するに、君の女と云ふのは

いつも幻覺であり、同時に……」

が、こんなことがどうしてそのまゝ松子に云はれやう。彼は今更、今西氏を仲人に頼まうなんて云ひ出したことを悔いた。だからと云つてまた今更、今西氏の仲介を斷つて他の人に頼まうなんてことも云はれなかつた。そんなことを云へば無論女から疑られる。そして結局、自分が今西氏から狂人扱ひされてゐる人間である事が曝れてしまふ。で、彼は女から責められる度びに、その時遁れに云ふのだ。

「なアに、その内機會を見て行くよ。行きさへすりや雜作なく引き受けてくれるんだ」

かう云つて一時延ばしに延ばしてゐる内にはどうにかなるだらう。女の方であきれ何んとも云はなくなつてしまふか、でなければ今西氏の方で折れて、自分から進んで面倒を見やうと云ひ出すか、どつちかに片がつくだらう。たゞ、その場その場の

駄をうまく合はせて居ればいゝのだ。——さうでも思つて自分を誤魔化すより他、彼には執るべき方法がなかつたのだ。

この時彼は初めて自分が今西氏のところへ行きはじめた、抑もその目的を思ひ出した劇作を以て將來世に立たうと云ふ野心を持つて居る自分に氣がついた。またその爲めに、數ある文壇の劇作家の中から特に今西氏を選び出して師事し始めた自分に氣がついた。それは、今西氏の進む藝術の方向が最も自分に近いやうに思はれるばかりでなく、どんな人間に對しても城壁を設けないうで交際してくれる、その態度に好感が持てたからであつた。

彼は今西氏の門をくゞり始めた。そして今日までつゞいた譯だつた。が、さういふ目的を持つて今西氏の許を訪ねはじめたにも拘らず、彼はこれまでにまだ一篇の作品をも今西氏に見て貰つたことはなかつた。いつも「近い内に書いて來ますからお願ひ

「します」を繰り返すばかりで、一向書いて來なかつたのであつた。いや、幾度か書きかけてはみるのだが、いつも途中で駄目になつて了ふのだ。俺は兎ても藝術家つて柄ぢやない。——さう悲しくも思ひ諦めることがあつた。がさう諦める傍から、彼はいつの間にか机に向つてペンを執つてゐる自分を見た。

さうした日の連続であつた。その苛々した彼の生活の中へ飛び込んで來たのが、松子であつた。彼は毎日その問題の爲めに頭を悩まさなければならなかつた。が、女の方に取つては、彼のそんな悩みは全然關知するところではなかつた。顔を見さへすれば、うるさく催促した。諦めるところの騒ぎではなかつた。

「まだ今西さんとこへ行らつしやらないの？一體どうするつもり？」

その聲を聞くと、そしてその眼を見ると、彼はぶるつと顫え上らずにはゐられなかつた。が、その鋭い視線は、ある時彼の心に天來の啓示となつて一道の光りを注ぎ込

んだ。彼はハツとしてその光りを掴んだ。それこそ、一切を解決する鍵であつた。

彼は、女の眼の前で思はず跳び上つて歡聲を發した。

「よろしい、こゝつを書いてやらう。これさへ書けば……」

いまこそ、今西氏に對して、自分の責務を果すことが出来るのだ。それはまた取りも直さず、自分の處女作として最も力瘤の入れられる、そして、最も意義ある創作になるのだ。それは自分の生ひ立ち、遺傳と環境、更に、松子と自分との關係……その他一切の事件を最も事件に忠實に、眞面目に一篇の戯曲とするのだ。それさへ完成したら、幾ら頑固な今西氏だつて自分に對するその獨斷と謬見とを撤回するだらう。さうなればそれは又取りも直さず、自分と松子との交渉を圓滑に進展させることが出来るのだ。今西氏も悦んで、自分と松子の爲めに骨を折つてくれるだらう。それこそ、一舉兩得の策と云ふものではあるまいか。その一作の爲めに自分は劇壇の新人として

迎へられる一方、松子は完全に自分と結婚することが出来るのだから。――

十

彼はベンを執つて、「滅び行く人々」の稿を起した、それは六月末の、彼に取つては一年中で最も悪い生活の始まる時期に屬してゐた。ぼか／＼暑くなり初める頃の、自然が若葉から青葉に移らうとする頃の一番いけない時であつた。發作はのべつだつたそれに、創作のベンを執り出してからと云ふもの、彼は現在勤めてゐる芝浦の工場をも兎角負け勝だつた。また、家庭の事情が今のところ、彼のその我がまゝをある程度までは許してくれた。幾らぐらゐあるものか全然知らなかつたが、それは案外僅少なものらしくもあつたが、兎に角、母親が父の遺産をしつかりと握つて、それに依つて生活だけはどうにか乏しいながらやつて行けることを知つてゐた。殊に、一家の采配

を揮つて居る母親も、彼に就ては少しも干渉がましいことは云はなかつた。彼は、彼の家庭に於て最も自由な位置に置かれた人間だつた。

創作の筆は濫り勝ちだつた。青葉は惱ましく彼に煩ひした。裏の窓下に机を据ゑ、彼は毎日原稿紙と睨めつこをしてゐた。書かうとするもの以外、いろ／＼餘計なものが頭の中に飛び込んで来た、また、忘れてゐたものがしみのやうに頭の底に浮み上つて来た。それらの取捨撰擇が、今の彼の頭ではなか／＼容易な業ではなかつた。まるで濃霧の襲來を受けたやうに、頭の中はもや／＼した灰色の渦を巻いてゐた。

窓の下では……彼の眼はいつか創作のベンをすつぽかして、裏の狭つこい庭で餌を拾つて居る鶏の一群を見てゐた。白色レグホンである。白い頸がひよいひよい休みなしに庭の土を啄いてゐる。赤い小さな鶏冠が、その度びに何かの花弁のやうに頭の上で跳る。と、突然消滅しい叫聲が起つて、交尾んで居る。……ふと、彼は何かの氣配を

感じて窓から首を引つ込めた。引つ込める途端、向ひ側の家の窓からちつと自分を見てゐたらしい一つの顔を見た。白い輪廓だけがぼやぼやつと眼の前に揺らいだ。……久しく逢はない、いや、逢ふことを避けて居る松子であつた。何か、眼と手を動かして頻りに合圖をして居る。が、彼はそれを見定めることが出来なかつた。

「ねえ、小森さん、あんた今何を見てらつしたの？」——さう訊かれさうな氣がしてならなかつた。

彼は、窓から首を引つ込めると、女の思惑なぞ考へ及ぶ暇もなく、びしつと障子を閉めてしまつた。併し、閉めてしまつて机の上に面を伏せてから、すまない事をしたな——と思つた。遂ひ目と鼻の先きの間ではあるが、當分逢はないで済ませる便宜上手紙でもつて、こゝ當分創作をする爲め外出しないことに決めたこと。今西氏の方へはそれが出来上つてから行つて、例の事も頼まうと思つて居ること。それらのいろく

の事を知らせてやらうと思つた。

彼は早速手紙を書いた。そして投函した。投函したその時から、彼の胸は妙にそわ／＼して落ち着きを失つて來た。返事が待たれて、女の思惑ばかり氣遣はれて、創作の筆はもうそれきり進まなくなつてしまつた。彼はその翌日再び手紙を書いた。

女は窓から顔を見せなくなつた。怒つてるな——と思つた。が、さう思ふと不思議に胸の中が落ち着いて來るのを感じた。同時に、創作の筆は意外にすらく／＼運び始めた。その爲めに、彼は何もかもを忘れる事が出來た。彼は、自分の創作が段々と進捗し、形を備へて行くのが嬉しくてたまらなかつた。が、それはほんの暫くだつた。その喜びも、満足も、びしやんと頭ごなしに押さへつけられる時が來たのである。

ある日—— 彼がいつものやうに机に向つて居るところへ、滅多に二階へ上つて來たこともなければ無論、彼のする事に干渉がましいこと一つ云つたことのない母が、

顔色を變へて上つて來たのであつた。そしていきなり、彼の頭のでつべんから尖つた聲を浴びせかけたのであつた。

「平次郎！ お前何んだつてあんな阿婆摺れのとこへ手紙なんかやつたんだい？……事もあらうにあんな出戻り女のところへさ」

「えゝッ！」と低く叫ぶと彼は本能的に耳を押へた。思ひもかけない、晴天の霹靂であつた。豫期しない詰責の聲であつた。彼はおづ／＼と眼を上げて、母を見た。彼の手からはいつかペンが滑り落ちてゐた。心臓の血が津浪のやうに耳元へ押し寄せて來て、沸騰した。

「えッ！ どうしてお母さん、それを……」

彼は辛じてさう云つて、眩しさうに母の眼を見た。が、直ぐにその眼を伏せて、母の顔から反向けしてしまつた。この時程母の眼を鋭く、そして、怖いと思つたことはな

かつた。

もう家には居られない――

瞬間、彼の頭を掠めた考へだつた。彼はぐつと呼吸を呑んで、次の母の言葉を待つた。が、どうして母がそれを知つたのか、彼には分らなかつた。まさか女が知らせやうとは思はれなかつた。そんな常識の缺けた女ではない筈だつた。が、それとも……「あの、立石のおやぢが血相變へてやつて來たんだよ。……あんたんこの息子さんが、うちのお松を誘惑しやうと思つて、まるで不良少年みたいな手紙を寄越して……」餘りに恐縮して震えて居る彼を、母の眼が今度は憫れむやうに見て云つた。その調子はぐつと和らいでゐた。

「そりや凄しい顔をして歎鳴り込んで來たんだよ。……幾度も幾度も手紙をやつたなんて、お前ほんとなのかへ？ まさかお前があんな出戻り女になにしようとは思はない

がね……」

さう頭から極めつけられてしまふと、彼は益々云ふべき言葉もなく、頭を垂れ下げるばかりだつた。が、彼はやつと決心したやうにおづく顔を上上げて云つた。

「ぼく、あの松子さんと結婚しやうと思つてるんです。そしてもう……」

はつきりとは聞き取れないくらゐその聲は喉にかすれてゐた。また、それ以上云はうとはしなかつた。彼は堅く口を噤んで了つた。

「お前ほんとに困るぢやないか。もつと考へてものをして呉れなくちや……それにこんな事も云つてたよ。癖になるから警察へ訴へてやる——つて」

「えゝッ？」

彼は跳び上るやうに愕いて叫んだ。が、さう云つてしまふと、母は見返りもしないで立上つて二階を降りて行つた。

「松子の奴め、あのおやちに告げ口したとすりや實に怪しやらん。それとも、あのおやちが手紙の横取りして……いや、兎も角一應確かめる必要がある」——

併し、日曜の夜が来ると、胸の中がむやみにさわくして落ち着いて居られなかつた。何か眼に見へない或るものに惹きつけられるやうな誘惑を感じて、あの事件のあつてからと云ふもの滅多に外出しなかつたに拘らず、ふら／＼と外へ出てしまつた彼の足はいつか教會へ向つてゐた。

教會は彼を呑み込んだ。松子の鋭い眼が、影のやうにふわふわと乗り込んで來た彼を準のやうに捉へた。そして隅の方から釘づけされたやうに鋭く彼を見据ゑた。

彼の眼はそれを電氣のやうに鋭く感じた。そして直ぐにその眼を見返つた。彼の眼に映る女の眼には、頑強に抵抗の意志が燃え上つてゐた。あいつ愈々俺に敵意を持つて居る。——どこまでも屈しないつもりだつたが、ちつと見詰めて居る内に彼は何ん

と云ふこともない或を恐ろしさを女の眼から感じて來た。その恐ろしさは併し、女の眼そのものにあるのではなく、何かその背後に控へて居るらしい或るものにあつた。その或るものは彼の頭が創造した一種の幻影であるかも知れない。彼の頭はその時何んとなく、女の父親が自分を警察へ引き渡すべく、適確な證據を掴むべく女の周囲に見張つてでも居るやうに思へてならなかつたのだ。ふとすると、父親とぐるになつた女はその機會を父親に掴ませるべく、何か自分に向つて仕掛けるかも知れない。身動きも出来ない程、彼には何もかもが恐ろしくなつて來た。

お祈りが済み、讚美歌が済み、説教が済み、……教會はやがて閉ぢられた。何んの爲めに教會に來たのか、彼には自分自身が分らなかつた。お祈りもしなければ讚美歌も歌はない。まして説教も耳に入れない。——彼は只、器械人形のやうに皆んなと動作を共にし、立ち上り、座り、眼を閉ぢ、口を動かし、したに過ぎない。

多勢の人々と一緒に教會を吐き出された彼は、ひとり、とぼくと暗い路を歩いた彼の足は無意識の裡に、いつも女と一緒に歩いた道を辿つてゐた。彼の足は知らず識らず、公園の暗がりに入つて行つた。森ツと静まり返つた暗黒の中に、彼の下駄の音だけが氣味悪く響いた。が、彼の耳はそれを聞かなかつた。彼の頭には、教會で一瞬間、敵意と敵意の眼で睨み合つた松子の影像がこびりついて離れなかつた。

俺がなか／＼今西さんとこへ頼みに行かないのを、そして、近頃ちつとも逢はうとしないのを怒つてるに違ひない——

この時彼はふと、背後に迫つて來るものの氣配を感じた。彼の頸は無意識に後ろにねち向けられた。彼の眼はその闇の中にぼくつと立つてゐる黒い影を見た。

黒い影は動いてゐる。段々近づいて來るのだ。ぶるぶると水を浴びせられたやうな悪寒が、脊筋を走つた。逃げ出さなくちや——が、足はすつかり竦んでゐる。縛り

つけられたやうに動かうとしない。

影は段々大きく、はつきりして来る。今は足音までが……すたつ、すたつ……響いて来る。彼はやつとの思ひで、その黒い影に脊を向けた。が、走り出さうとした瞬間ぎゆつと後ろから手が延びて彼を抱きしめた。温かい息吹が颯つと頸筋を掠めた。

「後を踵けられてるのも知らないで……可愛い坊や……」

はつとしたと思ふと、胸の中が急に激しい動悸を打ち始めた。松子だつたのか——と云ふ安心から来たものだつた。松子の聲も、妙に息苦しくはづんでゐた。

「小森さん、どうしてあんたひとの顔さへ見れば近頃逃げやうとなさるの？　ひとを散々玩具にしといて今更捨てやうなんかつて生意氣だわ」

俄かに變つた女の凄まじい鼻息は、すつかり彼の度臆を抜いてしまった。彼は女のする通りにからだを任せて、揉まれ放題揉まれてゐた。が、彼はやがて、女の疲れる

のを待つて云つた。

「捨てやうなんて、ば、馬鹿な……それどこぢやない。ぼく、すつかりあんたのお父さんから喝かされてしまったんだ。ぼくを警察へ訴へる——つて」

何をどう云つていゝか、頭の中がまるで滅茶苦茶になつて少しも順序立つて云へなかつた。が、彼は息をはづませて云つた。

「それに、だいち僕のやつた手紙を見ましたか。幾つも幾つもやつた手紙を……」

「手紙？　……阿呆らしい。こんな目と鼻の先きに居るのにどうして手紙なんかの必要があるんです？　……妾見やしないわ！」

「そ、それでだ……道理で……それぢやその手紙をすつかりあんたのお父さんに見られてしまつたんだ！」

「で、どんなことを書いたの？」

「どんなこと——つて、僕はいま脚本を一つ書きかけて居るんです。で、それが出来上つてから今西さんところへ行つて、あの例の一件を頼まうと思つてるんです」

「随分氣の永い人ね……そんな事どうでもいゝぢやないの。だいち妾達の結婚つていふことと、その脚本とどういふ關係があるの？」

女のその一言はぶすつと彼の急所を突き刺した。若し、明るい場所でのこの時の彼の顔を女に見られでもしようものなら、尙更女の疑惑を、それから追窮を急にしたらうと思はれた。彼はどきまぎしながらも、云ひ譯の言葉を突嗟に思ひ浮べて云つた。

「ぼくは前から劇作家で身を立てやうと思つてたんです。で、結婚でもするやうになればその時から自分達の生活を立てなければならぬでせう、で、それを書き上げてから今西さんにどこかへ紹介して貰つて、劇作家としての自分を文壇に賣り出し、それから例の件を頼まうと思つてたんです」

「さう言へ行くの？……でも随分氣の永い話ね」

「うん、こそそりや……」

ふたりはやがて、肩を並べて日公園の暗がりから外へ出た。

十一

夏の初まり時分から取りかゝつてゐた彼の戯曲、「滅び行く人々」はやうやくのことで脱稿した。夏も終り、秋の初まらうとする九月一日であつた。

まづ第一に今西さんに読んで貰はう。いや見せなければならぬ。今西さんに見せやうが爲めにのみ書かれた作品だと云つてもいゝくらゐのものではないか。が、それにしても今西さんは何んて云ふだらう？——一枚一枚と頁を繰るたびに變つて行くであらう今西氏の顔が眼に見へるやうだつた。驚異、驚異、驚異、やがて驚歎……今

西氏の眼は、熱と光りとできらく光つて来る。

ふむ、俺は今の今まで小森と云ふ人間を見損つてゐた。これでは彼の結婚の爲めに口を利いてやつてもいゝ。萬更のでくの棒でもなさうだ。——今西氏は屹度さう云ふだらう。云つて、自分の今までの謬見をすつぱりと捨てしまふだらう。ばかりではない、これが藝術的方面から見てもいゝものであるならば、あの親切な今西氏のことだ、必ずどこかへ紹介して呉れるに違ひない。——

彼は原稿を懐ろにして立ち上つた。

雨だけは霽つたが、外には恐ろしい風が吹き募つてゐる。褪紅色をした煙のやうな雲がどん／＼走つてゐる。

明日は二百十日だ。その前觸れがやつて来たのだ。

彼は思ひ出した。——今西氏は留守で、夫人が赤ん坊を抱いて出て来て、それから

俺はそこを飛び出して、市街自動車に乗つて、瓦落瓦落と崩れ倒れる家を見て、さうして……

彼は愕然として、まるで夢から覺めたものやうに跳び上つた。見る限りの火の海から打ち寄せる熱風が、髪も、顔も、着物も、彼の何もかもを焦がさん許りにどつと吹きつけて来たのだ。

風は變つたらしい。今はもう何一つ目標になるものはない。思出の多い教會の尖塔も、今は影だに留めない火の海の底に葬られて了つた。焔に吹きつける風は、今度は火の風となつて彼の立つて居る公園の丘目がけて吹きつけて来る。遠くの遠くの火の海の底から響いて来るらしい何んとも云へぬ微かな呻り聲が、火と風との物凄い響音の中から盛り上り、湧き上つて来る。

母の顔……兄の顔……松子の顔……いろいろな顔が火の海の中に浮ぶ。彼等は口々

に叫んでゐる。……たすけてくれ……たたたたすけて……

彼は、熱くなつて段々に公園の奥の方へ退り始めた。避難者で身動きも出来なかつた。避難者の中での手廻しのいゝ者は、家財道具一切から商品までも持ち出して積み上げて居る。おどろした恐怖の顔が幾つも見守つて居る。

俺は彼等を見つければならない。母を……兄を……弟を……そして松子を……さうして彼等の先途を見届けなければならぬ。これ程の大事になつたのには俺は遠ひぞ家の様子も見ずじまつた。——苛責の念がひしひしと彼の胸を痛めつけた。

彼はよろ／＼しながら立ち上つた。朝から何も喰べて居ないにも拘らず、さして空腹も感じてはゐなかつた。が、からだか云ふことを聞かなかつた。踏みしめる足に力が入らなかつた。

頭上高く、斜め東北の空に大きな一塊りの雲がちつと一つところに停滞してゐる。

晝間、且公園へ通込んだ時見た雲である。それが、停滞しながらもく／＼益めいてゐる。火の海の光焰が、その雲に反映して血のやうに赤く染めてゐる。併かも、火の海の中から發する無数の呻き聲が合して、凄絶極はまる響音を作り、頭上高く血の雲の中に吸ひ取られてゆく。

何んて氣味の悪い雲だらう。——

よろ／＼と、どこか云ふ當てもなく歩いて居る彼の耳をふと、聞き覚えのある聲が掠めて通つた。吸ひ寄せられるやうに彼の首はねぢ向けられた。

松子だ！……はつと思ふと彼は立ち停つた。松子、松子、松子……

彼は夢中になつて走り寄つた。

「松子さん！」

が、もろくも彼は弾き飛ばされた。

「何をするのよ、馬鹿！ 氣狂ひ！ ——何んて厭やつたらしい眼だらう！」

女のその嗷鳴り聲は、周圍に居る澤山の顔を瞬間、二人の方へねぢ向けさせた。が彼等はまた直ぐにその眼を火の海の彼方へ、頭上の雲へ、と夫々の方向に復して了つた。

どうしたつてんだ、松子の奴、……何もかも灰にしちまつたんで頭がへんになつたんじゃないだらうか。——

弾き飛ばされた彼は、よろ／＼つとよろける途端、何かに蹴つまづき、蹴り飛ばした。硝子瓶の碎ける音がした。彼の眼は、電光のやうに飛んでそれを捉へた。……香水の瓶である。見た瞬間、彼の鼻は、久しい間忘れてゐた香氣をむせ返る程激しく吸ひ込んだ。そこには、香水、香油、お白粉、石鹼……が山のやうに積まれてあつた。化粧品屋の避難場であることは一目で知れた。

彼の眼は輝いた。異様な光りを帯びた眼が、火の海から来る光りを反射して赤く燃え上つた。彼の手は、素早くその瓶の一つをさらひ上げた。

にやりとした微笑が彼の眼元を流れた。そして、その眼はたつた今自分を突き飛ばした女をひたすら追ひ求めた。彼の眼はこの時再び満足さうに、にた／＼と皺／＼刻んだ。求める女を眼の前に見つけたのであつた。……松子は俺を見て居る。俺が誰れであるかと云ふことをやつと氣がついたと見へる。今度こそあいつがこの俺に飛びついて来て、接吻を求める番だ。——

そこで彼は悠々と女に背を向け、木蔭に向つて歩いた。彼の背は、ある期待にむづ／＼した。彼は三抱へもある大木の蔭に膝をつき、手にしたお白粉の瓶の蓋を脱つた。

火の海から来る反映に焼けついてひり／＼してゐた彼の頬は、なめらかな、併かも

香り高い水お白粉を塗られててら光くつた。

ある快感が恍惚とした忘我の境に彼を導いた。彼の眞黒に汚れた掌は、幾度かこぼりこぼりと水お白粉を受け、それを顔に塗つた。塗つて居る彼の眼の前にバツとS停車場の待合室が現出する。はつと思ふと、それがまた忽ちにK醫院の薬局になつてゐる。彼の頭にはいま家の心配もなければ火事の恐ろしさもなかつた。現在、眼の前に起つてゐるこの空前絶後の大火災も只、一色に塗られた赤色のカーテンを見るぐらゐにしか彼の頭を刺戟しはしなかつた。眞赤なカーテンを透して、燦爛とした光りを放つて登つて来る太陽を見るやうな朗らかさがあるばかりだつた。燒け落ちてしまつた家の事も、教會の事も、母の事も、兄の事も、何もかもが夢よりも淡く彼の頭からその影を消してゐた。

人々は行き違ひ、馳せ違ひ、悲鳴を揚げつゝ右往左往してゐる。誰れ一人、この樹蔭にうづくまつてお白粉を塗つて居る一人の青年に氣のつくものはない。

お白粉の瓶は空になつた。彼は立上つた。澤山の男に交つてまた無数の女が逃げまどうて居る。彼の眼は、その混亂の渦に巻き込まれまよろ／＼うろつき廻つた。が、忽ちにその中から一人を選び出すと、踊るやうな身振りをして走り出した。手を振り足を揚げ、落葉の如く、彼のからだはひら／＼火の海を前に舞ひ踊つた。そして叫んだ。

まつ子さん、まつ子さん、ま——つ——こ——さ——ん——……

彼の姿はそのまま混亂の人波の中に、火の海の中に、見へなくなつてしまつた。

(了)

睨
み
合
ひ

ぼつりぼつりと浮んだ白雲が、底の知れない青みを湛へた晩秋の空を何んもなく温かい柔かみのある表情にしてゐる。近づき難い深みと、威容をもつた人格考の面上を時に、穏やかに掠める微笑のそののやうな感じである。

狭い掌ほどの裏の畑はしつとり黒く濕つて、白い蒸氣が微かにもや／＼立ち上つてゐる。一三日前に蒔かれた菜の種子でも啄むのか、雀が二羽三羽、ジュク／＼ジュク／＼と啼きながらピョン／＼跳んでゐる。跳びながらまたそれがジュク／＼ジュク／＼と友を呼んでゐる。呼んでゐたかと思ふとパツと一握りの土塊でも投げ飛ばしたかのやうに斜めに飛んで空に舞ひ上る。と、それがぼつかりと日を受けた障子に大きな影を落して、瞬間に障子の面から消えて了ふ。

穏やかな日曜の朝である。妹のベット——クマが日當りの縁側の隅にまるく蹲つてからだ中に朝日を浴びてゐる。眞つ黒な毛が天鵝絨のやうに艶々しく光つてゐる。ク

マは時々薄眼を明けて、どこからかすうつと降りて来てはまた忽ち土塊のやうにパツと飛んで行く雀を見てゐる。ピョン／＼跳びながらジュク／＼と啼くのをみると彼女の眼はだん／＼大きく睜られて怪しい光りを放つて来る。天鵝絨のやうな毛がどことなく殺氣を帯びて立つて来る。——

これまで、一日として家を明けたことのない母までが交つて一家四人、それが稀らしく打ち揃つて可なり長い間の懸案であつた江の島見物に立つた後である。がた／＼びし／＼箆笥の抽斗を明けたり閉めたりしてゐた二人の妹、それから父と母——それが出拂つたあとの家の中はまるで嵐の去つた後のやうな静けさが漂つてゐる。留守居に残つた信策はひとり、その嵐の後の静けさに浸つてぼかんとしてゐた。が、ふと自分に戻つた時、彼の眼は縁側の隅に蹲まつてゐるクマを見付けてにやりとしたへんな微笑を洩らしたのである。その時の彼の眼はかうクマに向つて語られてゐた。「こん畜

生——今日こそ覚えてやがれ、取つちめてくれるから……」

彼は猫を好まない。が、彼の胸をいまうづくと擦つた殘虐の豫感ほ單にそれだけではない、何かもつと複雑したものがあつた。

「見さん、あとでクマにこはんをやつて頂戴ね、経節ももうその戸棚にかいといてあるから——」

それは出て行く時、そわ／＼しながらも尙忘れずに留守居の信策に投げて行つた須美子の言葉であつた。

「あゝいゝよ、分つたよ、行つておいで」とその時、信策の口は何氣なくさう云つたのであるが、腹の中では、「誰が糞——」と叫んでゐたのだ。

「今日こそお前はたつた一人の保護者を離れて、憎めばと云つて少しの愛もない主人の許に生きぬばならぬのだ」

が、日當りの縁側にいゝあんばいにくま／＼なつて温もつてゐるクマを見ると、たつた今さう眩いた信策ではあるが流石に「憐れな者よ」と思はずにはゐられなかつた。

最初、犬を飼ひたい、と云ふ希望を信策が出した時、税を取られる、大飯を喰ふ——と云ふやうな理由の下に斥けられて、その代りにこのクマが貰はれて來たのであつた。元々猫が嫌ひといふわけではなかつたのだが、さういふ理由で犬の代りに來た猫かと思ふと信策は内心甚だ平らかでなかつたのである。併かも、それがもう九年といふ長い年月になるのだ。彼女は今日まで九年、彼の家に飼はれつゞけて來たのであるで、その長い間にはいろいろの理由で幾度、捨てゝ來い——と云ふことを須美子に云ひつけたか知れなかつたのだ。が、信策とは反對に最初は猫が嫌ひで始終苛めてばかりゐた彼女が、いつの間にかこのクマとは肝膽相照らすと云つたやうな大の仲よしとなつたのである。いや仲よしと云ふ埒を越えて、彼が苛めると意地になつてかばい立

てるのである。彼女がかばい立てるから一層彼が苛めるやうになるのかも知れなかつた。

ところがクマは近頃老齡のせい、兎相ばかりしてゐる。信策がクマを苛め始めたのもつまりは、その兎相を頻繁にするやうになつたからであつた。それに今年の春、現在の家へ引つ越して来る時など幾らでも、この兎相ばかりする老猫を元の家へ置いてきぼりに出来たものを、須美子が無理に、殆ど信策と喧嘩しない許りに争つて二里も離れてゐるこの家へ連れて来たのであつた。だから、それがいつもクマが兎相をした時須美子に怒る信策のいゝ口實となつたのだ。

クマは春と秋には必ず三匹か四匹づつ仔を産んだ。しかし大概は半年と経たない内に近所の家へ貰はれて行つたが、時に依ると雌猫だから厭やだとか、毛色が氣に喰はないから厭やだとか、いろ／＼の非難を受けていつまでも家に残つてゐる事があつ

た。で、この時も一月許り前に生れた子猫が三匹ともそつくり、家に残つてゐたのであつた。

「困つたねえ、いつまでも家にゐて」――

父と母の口からは時々さう云つた嘆聲が洩れた。が、ころ／＼と鞠のやうに轉がりながらじやれるところを見ると、もつといつまでもいつまでも家に置きたい、と云ふ色はその眼の中に讀まれた。家の中に一寸した不和があつて、その空氣が皆んなの心を妙に苛々と尖んがらせる時でも、一度、仔猫たちがじやれ始めるとそれまで凍つたやうな空氣が急に、洋々とした春の日に復つて行つた。だから兎角雲行きの怪しくなり勝ちな信策の家ではその和解劑としてこの仔猫たちは仲々重要な役目を勤めてゐる愛嬌者であつた。

しかし雨の日ばかりは弱つた。外を歩き廻つて全身をぐしよ濡れにした奴がびよこ

んと縁側に跳び上るのだ。そしてからだ中の毛をぶる／＼と震はして座敷の中をのそ／＼と横切るのだ。とその足跡が縁側から勝手の方まで縦貫する。けれどそれが須美子に見付かつたのなら猫共は幸である。「まア仕様のない猫！」と云つて、座敷の泥を拭つたあとの雑巾で足の裏を拭いて貰へたから。叱られもどうもしない。が、若しそれが信策の眼に入つたのなら大變だ。叱ッ！と云ふ針よりも鋭い怒聲が先づ、彼女達の心臓をピリツと顫へ上る程に強く搏つ。それから、そこらにある煙管でも茶碗でも手當り次第に投げつけられる。だから近頃のクマと來たらすつかりそれを呑み込んで、足の汚れてゐる時に信策の顔を見ようものなら一散に二階へ駆け上つてしまふのである。それは一層彼女に對する信策の感情を悪くした。併し須美子は、信策の手をうまく脱れた彼女を祝福するやうに晴れやかに笑ひながら、雑巾を持つてそのあとから一段々階段を拭いて行くのである。「まあ仕様のないクマねえ」と呟きなが

ら。

可なり前の事である。寒い朝早く、信策は小用を催してまだ起きて了ふには早い四時頃、二階から眞暗な階段をみしりみしり降りて來たのであつた。と、下から二三段目といふところまで來た時、彼の足はぐちゃりと何かしら踏みつけたのだ。ハツとして足をすくめた。が、それが何んであるか分らなかつた。冷たい、何かべと／＼した物である。咄嗟に、信策の頭にはクマの毎々やかす鹿相がつうつと電光のやうに掠め過ぎたのであつた。その瞬間、ぐちゃりと踏んづけた足の邊からぞうつと毛穴が立つて、全身を硬張らして了つたのであつた。

「しまった！」と口の中で叫びながら、信策は片足でとん／＼と電燈の下つてるところまで跳んで行き、バツとスキッチを捻つた。そして恐る／＼足の裏を見た。眞赤だおやッ！と思つた。彼は電燈の紐を長く伸ばして階段の隅つこを照らした。何かぐ

ちや／＼した赤黒いものがある。蚯蚓のやうな細長いものがある。息を詰めて見てゐる内に彼の全身はぞく／＼と身慄ひをはじめた。そのぐちや／＼したものゝ正體が分つたからだ。細長い蚯蚓のやうなものはまぎれもない胴中から咬み切られた鼠の尻尾であつた。ぐちや／＼したものはその腸であつた。――

足を洗ってから信策は須美子などの寢てゐる寢室を通つて便所へ行つた。見ると、クマは須美子の布団の中へもぐり込んで、顔だけ人間がするやうに出して寢てゐる。口の周圍を紅く血に染めて――

それを見た時、信策はもう我慢にも見通しに出来なかつた。いきなりその頸つ玉を捉まへて引き摺り出した。と、づる／＼と出かゝつたクマは後脚の爪を布団か何かに引つ掛けて、どうしても出て来ようとしなない。そればかりではない、今まで眠つてゐることゝばかり思つてゐた須美子が、いきなり大きな聲で叫んだのである。

「あッ、痛い！ 兄さん何するのよう！」

そして片方の手でクマを抱きしめ、片方の手を布団から出して電燈にすかして見てゐるのだ。猫の爪の跡が三四本、赤く蚯蚓脹れになつて血が滲んでゐる。彼は心臓をどんと何かで衝かれたやうに感じた。が、それを反撥するやうに叫び返した。

「何をするもあるもんか。汚ない！ クマの口を見ろ！ 血だらけぢないか。鼠を咬ひかけて腸が一杯散らかつてらア」

さう云つて捉まへてゐた頸つ玉を離すと一緒にゴツーンと一つ殿つたのである。とクマはハツと耳を伏せて頸を縮めて了つた。

信策は何に對するともない腹立たしさの爲めに、胸がむか／＼して耐らなかつた。

「そんなにクマが可愛けりや早く起きて階子段の掃除をしろ！ 汚ない！」

彼は胸をげえ／＼云はせながら腸を避けて二階へ上り、布団へもぐり込んで了つた。

それから信策がクマを苛めれば苛めるほど、須美子は意地になつて可愛がるのである。時には皆んなの見てゐる前でクマの口を接吻してやる事さへあつた。馬鹿な女だ——と思ひながら、信策は躍氣になつて意地を張る須美子を憐れみずには居られなかつた。

日向ぼつことをしたくもまだ日の當らない朝の内は、クマはいつも台所へ行つて七輪の傍にまるくなつて蹲まつてゐた。そこでは大抵の場合、炭火が赫々と起つてストーブのやうに暖かくなつてゐたから。それにこの頃になつて母に代つて臺所働きをするやうになつた須美子は、芋の皮を剥きながらも、また味噌を磨りながらも、始終クマの頭を撫でたり、接吻をしたり、また時には蚤を捕つてやつたりして、一寸でもクマを離れてはゐられないと云つた風であつた。

「せめて食べ物の事をする時だけでも猫いちりは止せよ。汚なくて仕様がありやしな

5-1

信策はさうしてゐる時の彼女を見るとうるさく注意した。すると、彼女は今度は鍋の中で煮てゐるものを——肉でも魚でも惜しげもなく摘み出してはクマに與へる。また、信策などの眼から見たら故意に、クマに奪らせやうとしてゐるかのやうに、棚の上などに買つて來た魚などを置くのである。すると註文通りにクマがそれを銜へて行つて了よ。

「ほうら、そんなとこへ出しとくからまた盗られて了つたぢやないか」信策に限らず誰れでもそれを見つけた者が云ふ。すると須美子は待つてました——と云はぬ許りに云ふのである。

「いゝわよ、その代り妾しが喰べないから」

信策の頭はいつかもう須美子とクマとを離して考へる事が出來ないやうになつてゐ

た。クマが魚相をしたり悪戯をして障子を破つたりした時は須美子に當り散らし、また、須美に何か癢に觸るやうな事がある時は、クマを見付け出して来て頸つ玉を掴んでぶら下げ、無暗に頭を殴つたりして苛めた。併し、さうして餘りひどく苛めた後では信策は屹度、無氣味な思ひをさせられるのであつた。それは、彼の手から離れてパツと二階へ逃げ上りさま、階段の途中でぐるつと向きを變へ、薄暗い處からぎらつとその二つの眼を光らすからである。そして、この怨みは決して忘れないぞ——と云つたやうに凝乎と彼を睨めるからである。

併しそれが若し晝間なら、薄氣味の悪い眼をしやがるな——ぐらゐですましてしまふのだが、眞暗な夜中になぞひよいと眼を覺ましてその時の事を想ひ出すと、何とも云へない恐怖を感じるのであつた。殊に、猫といふものについては昔からいろ／＼の迷信があり傳説がある。しかもそれが皆んな、陰險な、凄惨な、血腥い傳説ばかりで

ある。それを頭から信ずると云ふのではないが、併し、十年も飼はれたやうな老猫はどんな報ひをしないとも限らない——と思ふと、矢張りいやな氣がした。闇の中のことか、クマが鋭い爪とそして牙を磨きながら自分の喉笛を覗つてるやうに思はれて兎ても平氣でゐるわけには行かなかつた。あの怨みを含んだ眼をぎよろり光らせて、隙を覗つてゐるところが眼に見えるやうにはつきりと想像された。で、だん／＼と布團を頭の上に乗せて引きかぶつて、息を殺して夜の明けるを待つ。けれど一旦夜が明けて朝が来ると、夜の恐怖はからり頭から抜け去つて、彼の猫を苛める事は依然として繰り返される。

江の島見物で愛物の事も何もかも忘れて了つたらしい須美子や、そして父や母を送り出して了つた時、信策は何とも云へない満足を感じたのであつた。その時彼は、今

日こそ一つ思ふ存分とつちめてやれ——と、自分で自分にうなづいて、何も知らぬげに蹲まつたゐるクマを見下したのであつた。

どういふ方法で——といふ事が先づ第一に信策の頭を悩ました。けれど、自分の足許にどうでもして呉れ——と云つたやうに身を投げ出してゐるこの小さなものを見ると多少憐れみに似た感情が湧かないではなかつた。彼は思はず「クマ」と優しい聲を出して呼んだ。三匹の仔猫たちは皆んなクマの腹の下へ首を突つ込んで、お互ひに両手を働かしながら一番澤山出る乳を探し求めてゐた。

クマはその時むつくり首を起して信策を見た。そして、彼の眼にある何ものかを讀み取つたかのやうに、ひよいとからだを起して急いで自分の飯碗のある場所へ走つて行つた。その拍子に今まで乳に吸ひついてゐた仔猫たちは一齊に振り落されて、まるで誰つこの啼くやうなピーヨーピーヨーといふ聲を立て、彼女のあとを追つたの

である。彼女は飯碗と信策の顔とを等分に見比べながら、ニヤーンと妙なアクセントをつけて鳴いた。それは明らかに、飯をくれ——と云ふ催促であつた。が、彼はその鳴聲の裡に可憐を感じるよりも寧ろ、至當の権利を要求すると云つたやうな傲慢なまた、挑戦するやうな或る反抗を感じた。

「糞！ 誰が飯なんかやるもんか！」

さう彼は、敢然と云ひ放つた。それで自分以外四個の生命の司配權を握つた満足に悠々と自分だけの朝食を攝つたのである。ところがクマは、彼の顔さへ見ればニヤーンと鳴いた。そして急いで自分のお碗のある場所へ走つて行つて、お碗が空つぽであることを訴へた。

「畜生！ 誰れが飯なんかやるもんか。貴様は疾うから捨てよう捨てようと思つてたんだ。今日やつとその機會が來たんだ。待つてろ捨て、やるから」

信策は本當にどこかへ捨てゝ來ようかしらと思つた。そして捨てゝしまつた後を空想した。——どこを見ても敵である。冷たい自然である食物一つない。往來には狩猛な犬がゐる。自分を見さへすれば跳びかゝらうとする咬ひかうとする。棒切れを持つた小供がある。石塊がどこから飛んで來る。それよりも自分は一體どこへ行くのだ。主家へ？ だが此處はどこだ？ 方向さへ分らないではないが。絶望と空腹とが自分を盲目にする。思ひ切つて人家のある方へ近づく。掃溜を漁る。いつ敵が自分の背後を襲ふかも分らない。が、それもいゝ。あの三匹の自分の仔猫たちはどうしてゐるそれを思ふと氣が狂ふ。頭がへんなになつてバツとどこと云ふ事なく驅け出す。きりがない。息が苦しくなる。それでも走つてゐる脚は止まらない。脚を緩めたら最後何か形の知れない不幸が自分に跳びかゝりさうに思はれる。眼がくらんで、心臓が破裂しさうになつて、やがてぶつ倒れる。一切が終る。どこからか跳び出して來た猛犬

ががぶりと咬みつく。——

信策の頭に描かれたクマの最後である。如何にも可愛相になつた。捨てることだけは思ひ止まらなければならなかつた。それ許りでなく、眞つ晝間、大きな猫を抱へて往來の劇しい人通りの中を憚るやうに歩く自分の姿が如何にも無情に、そして惨めに思へたから。

信策は格子を外から開かれないやうに釘を差して來て、二階の書齋に引き揚げた。と、クマは着物の裾にからまるやうにとん／＼と一緒に上つて來て、机の周圍をうるさく鳴き立てた。

ニヤーン、ニヤーン……………

尻尾をピンと立てゝ、大きく裂けた口から眞赤な長い舌を焰のやうに渦巻かせて見上げる様子は、何となく眼玉でも覗つて跳びかゝつて來るやうで、思はず前後を見廻

はした程であつた。

まさか——とは思ひながらも、ともすると彼の心には單に迷蒙として打ち消す事の出来ない程の形をとつて、猫の執念だとか、變化だとか云ふものが浮んで來た。彼の頭はいつか柔順な飼猫としてのクマを見ることが出来なくなつてゐた。信策は突然、頭をこすりつけながら鳴き寄つて來るクマを目がけてポカーンと殴りつけた。そして同時に、全身の怯へを一掃するやうに虚勢を張つて「シューッ」と呷鳴りつけた。

と、クマはハツとしたやうに耳を伏せそこへ匍伏して了つた。が、やがてそろ／＼と上げたその眼を見るときもどうしても續けて打ち据ゑる事が出来なくなつて了つた。彼がさうして躊躇してゐる間に、彼女は更に打たれることを怖れるやうに彼の手をすり抜けるが早い、脊を低め、尻尾を垂れたまゝ、颯つと階段の降り口目がけて跳び出したのであつた。彼の眼は思はずその後を追つた。と、彼女は階段に一足降りかけて

からひよいとからだを捻つて、彼の方を振り返つたのである。その二つの眼は何んとも云はうやうのない凄味を湛へて、執念深い復讐の色を明さまに燃え立たせてゐた。彼はぞつとして眼を反らした。とクマの方でも眼を反らしてとん／＼と音を立て、下へ降りて行つた。彼の耳は瞬時の間、階下に向つて鋭く働いた。すると今まで靜まり返つてゐた階下から不意に、仔猫達の鳴き聲がけたましく響き始めたのであつた。それは如何にも哀切な調子をもつて、意味は通じないながらも惻々として人の心に喰ひ入るやうな響きをもつてゐた。

あれは確かに飢ゑを訴へてる聲だ。乳を求めてる聲だ。——
彼はクマに最早や乳が缺乏し始めたことを知つた。飢ゑ——その飢ゑは今直ぐにも自分の手に依つてどうにでもなるのだ。その刹那彼は自分の意志如何に依つて如何なる程度にまでも苦しませる事の出来る地位を自覺して王者のやうな誇りを感じた。が

これを若しこのまゝに何時までも放つといたら、クマ母子はその飢ゑを充たす爲めにどんな事をし兼ねないものでもない。他所の家の勝手口から忍び込むか、掃溜を漁るか、若しそれでも得られなかつたら――

此の時彼はふと、暫く前の新聞で見た××縣下の悲慘事――と云ふ雑報を想ひ浮べた。或る百姓家で飼つてゐた老猫が、赤坊一人を寝かしつけて一家揃つて野良へ出拂つた留守に、その赤坊の喉を咬み切りそのまゝ何處かへ逃走した、と云ふのであつた。――信策は愕然として自分自身を顧みた。

併しそんな事が減多にあつてたまるもんか――と云ふ心は直きに、そんな減多になり事件の爲めに一瞬ではあるが怯やかされた自分の心を嗤ひ消してしまつた。

階下からは依然としてピーヨーピーヨーといふ哀切な律を刻んで、仔猫の鳴き聲が断續した。その中に交つてクマのニャーオンと云ふ無技巧な、只、欲求そのものを現

はしたやうな太い鳴聲が、頭の中をえぐるやうに鋭く貫いた。

「須美子！ お前の愛物が今飢ゑてるんだ。親子四匹が揃つて他所の掃溜でも漁らうとしてゐるのだ。どうにかしてやれ！ 俺は知らないから――」

信策はいま須美子に對して、また猫に對して、又その何れに對するともない復讐の快感に酔ふて、まるで音楽にでも聴き入つてゐるやうな恍惚境にあつた。が、暫くすると彼の心のどこかで、餘り残酷だ、飢ゑ程苦しいものはないのだ、もう好い加減に飯をやれよ、可愛相ぢないか――と嘯くものがあつた。そして同時に、お前の須美子に對してまたクマに對して懐いてゐる悪感情と云ふものが一體どれ程の事を意味してゐるのだ。どこにさうして復讐しなければならぬ程の怨みがあるのだ、それは復讐でも何でもありやしない。只、お前の殘虐性を満足させる爲めの道具に使はれてるに過ぎないぢやないか――とも嘯いた。

信策は立ち上つた。そして飯をやらうと思つて階段をみし／＼云はせながら降りて行つた。と、火鉢の傍の坐布団の上に寝轉がつて乳を哺ませてゐたクマが、ピンと耳を立て、降りて行つた信策を見守つてゐた。その眼を見ると、彼はどうしたものか。今までの憐憫の心がふいつと何處かへ飛んで行つてしまつたのを感じた。

厭やな眼だ。何と云ふ不遜な眼だ――

さう思つて信策はぐつと睨みつけてやつた。が、信策はこれまで猫などの眼にこれ程の力――感情が盛られてあらうとは思はなかつた。それはまるで憎悪と敵視との塊りであつた。

暫く睨み合ひがつゞいた。と、クマは何んと思つたか三匹の仔猫を乳から振りほどいてパツと戶外へ飛び出してつた。仔猫たちは飽氣に取られたやうな顔をして見送つてゐる。が、直ぐにその空腹を思ひ出したやうにピーヨーピーヨーと氣忙しく鳴き

立てた。

夜が来た。皆んなが歸つて来るまでにはまだ三時間ぐらゐ待たなければならなかつた。信策はまた一人で食卓に向つた。クマ母子はいつの間にか例の通りお膳の下に入つてゐた。いつもなら食事のすむまで大概おとなしく其處で待つてゐるのだが、今日はうるさく鳴き立てながらお膳の下を出たり入つたりした。そして朝から何も入れて貰はない自分の飯椀のところへ行つて、ニャーオンと一つ鳴いては歸つて来て彼の顔を見るのである。併しその眼には晝間見たやうな憎悪や敵視の色は些しもなかつた。只、一途に食物を欲求する色が漲つてゐた。けれどその飢渴を訴へるが／＼した有様は、單に淺間しいと云つて斥けてしまはれなかつた。彼はなるべくクマの顔を見ないやうにして食事をした。それは見てゐる内にだん／＼憐れみの心が出て來さうでならなかつたからである。こゝまで自分の感情を押さへつけて來たのだ、こゝで負けてな

るものか——彼は自分のこの殘虐に對して他の自分がどれだけそれに耐へられるか、その強さを試す爲めに今日一日このクマを苛め通さうと決心したのである。

信策はいつもの癖で、お膳の隅っこへ魚の骨や何かなすりつけてゐた。と、お膳の下にゐたクマはだん／＼首を伸ばして、鼻の頭をびく／＼動かしながらお膳に近づけて來た。そして今度はその片手をお膳の隅にかけた。殘虐と憐憫の心が二つ、心の裡で闘つた。彼は矢張り見て見ないふりをしてゐた。が、次の動作に移つたが最後ポカンツとやらうと思つて胸をどき／＼させながら待つてゐた。と、クマは今度は後脚でそろ／＼立上つて、お膳の隅に積み上げられた魚の骨をバツと拂ひ落した。待ち構へてゐた彼の手はその瞬間堅く握りしめられてバツと彼女の頭に飛んで行つた。だが、彼女はいつものやうに耳を伏せて慌てゝ遁げはしなかつた。耳はバツと頭に吸ひつけられたが、同時に脊を低めて、ふ／＼と低力のある低音で唸つた。唸りながら矢庭にその

骨を啣へてお膳の下にもぐり込んでしまつた。

骨を嚙む音が暫くポキ／＼とつゞいたが、その音が止んだかと思ふとまたそろりそろり初めのやうに首を伸ばし、前脚をお膳の隅に掛け、後脚で一寸二寸と立ち上り始めた。けれど、お膳の隅にはもう前のやうに骨も何もなかつた。何をするだらう——と云ふ好奇心はちつと信策をして彼女の爲すがまゝに任して見てゐた。と、クマの瞳がヒラツと電光のやうに閃いたかと思ふと、その右前脚は素早く皿の中にあつたものを掻き出してゐた。

「こん畜生！」と叫ぶのと、コツーンと彼女の頭を殴るのが殆ど同時であつた。併し驚いたことには、彼女は前よりか更に圖迂々々しくなつてゐた。殴られると同時に疊へはりつくやうに身を伏せながらその兩前脚でしつかと、自分が掻き落した獲物を押さへつけてゐた。そして折角奪つたその獲物を奪ひ返されまいとして牙を剥き出し、

鼻に皺を寄せ、眼を瞋らし、全身を反抗そのものにして唸りつとつけた。

その反抗的な態度は少なからず信策を愕ろかし、その疥癩を募らせた。彼はいきなり、獲物を押さへつけて力み返つてゐるクマの首筋を掴まへて、窓から外へ放り出した。魚の一片は空しく畳の上に残された。彼はそれをも素早く火箸でもつて挟んで窓の外へ投げ捨てた。と、それと同時に彼女は窓からヒラリ飛び込んで来て、頻りに鼻を畳に擦りつけながら嗅ぎ廻つた。彼はまたその頭をゴツーンと強く殴りつけた。クマはふーつと唸りさま、身を少し返らせて前脛をふんばり、信策の顔を乾ツと睨んで身構へた。彼はハツとして手を引いた。

クマのその態度は明らかに、信策に対する對敵行動の第一歩であつた。暫くして彼女は再びふーつと唸つた。その唸る度びに、普段はそれ程眼に立たない口が、焰のやうな眞紅に裂けて十分な示威運動を起し始めた。そして彼の顔を目がけて跳りかゝり

もし兼ねまじい勢ひで睨みつけた。彼は脊髄の邊をぞく／＼と氷で撫でられたやうな悪寒と、言葉に現はせない氣味悪さを感じた。

彼の手は無意識の裡に火鉢の中にさゝつてゐた火箸を掴んでゐた。次の瞬間には、その火箸を振り上げて「シューツ」と怒鳴つてゐた。その聲は自分にも氣愧しい程顔へを帯びた、誠子外れのものであつた。

クマはたじ／＼と後ろへ退りながら、前よりも一層口の赤色を現はし、鼻の頭に皺を寄せながら「フワーツ」と唸つた。それは今にも跳びかゝりさうな氣配であつた。一寸眼を離したら最後、直ぐその隙につけ込んで來さうに思はれた。その不安は、彼の心を全く怯け立たせてしまつた。彼の心臓はいつか不規則にどきツどきツと高く鼓動してゐた。

彼はもう食事どころではなかつた。クマの方では時々氣合をかけるやうにフワーツ

と云ふ唸り聲を發した。耳の直ぐ下まで裂けてゐる口からは、その度びに焰のやうな氣味悪い赤色が現れた。彼には思ひ切つてその手に持つてゐる火箸を投げつけることも出来なかつた、只、ふりかぶつたまゝ少しでも隙を見せたら投げつけてやらうと覗つてゐる許りであつた。

室の中は森ツと陰惨な氣が漲つた。兩者の呼吸はだん／＼急迫して來た。彼の額から、また双方の脇の下からは冷たい油汗が滲み出して來た。その急迫した間にも、彼はこの結果がどうなるだらうか、といふ事が氣になつた。自分の眼玉を覗つて跳びかゝる、呀ツと云つて眼を押さへる、その隙に喉笛に咬みつく、——信策はぞくぞくと膚に粟立つのを覺えた。

誰れか來てくれゝばいゝが……もう江の島から歸つて來さうなものだのに——
信策はさう思つてうつかり時計の方に眼をやらうとした。が、慌てゝまたクマの方

にその視線をかへした。

(了)

——一九三三・一一——

盜

難

はじめの二晩程、妙に毛つ臭い寐床で眠れなかつたが、三晩目あたりからはいやにしくしくと喉のあたりをさす毛布の毛も、その臭ひも、氣に留めないで私はよく眠る事が出来た。だが眠りには落ちてても、コットンと鼠が棚の上に降りた音にも、コツンコツンと班内を見廻りに来る週番士官の靴の音にも、私の胸はぎくんと大きな波を打つては眠から覺まされた。それは抑もの入營の日に、中隊長から云はれた一言が深く脳裡に刻まれてゐるからであつたらしい。

「銃とか劍とかの兵器は云ふに及ばず、背囊、水筒、飯盒、……と云つたやうな、お前達に支給される官給品の凡ては、お前達自身でどこまでも丁寧に管理し、紛失しないやうにしなければいけない。若し紛失した場合には、事情に依つては嚴罰に處す

るから左様承知せい！」

中隊長はさう云つたのである。しかも、中隊長の訓示が終つたあとで、班の古兵達は何何にも勿體らしく、中隊長の言葉を裏書するやうに云つたのだ。

「おれ達が新兵の時だつたな、入浴に行つて靴を搔つばらはれちまやつて營倉へ叩き込まれた奴のあつたのは……」

さう云つて古兵達はじろじろと、場慣れない眼をきよとんと臆病らしく伏せてる新兵達の上に注ぎかけたのである。ばかりでなく、新兵達の度膽を抜くのは今の内だ——と云つたやうに、彼等は更に追ひかけるやうに云つたのだ。

「去年の一期の檢閲の時にはなんだつたな、木綿の縫針が一本足りないのを見付かつて檢閲官からうんと油を絞られた奴があつたつてな、それ、何んとか云つた……」

……さうだの野郎よ！」

そんなくらひの事で營倉へ入れられたり、小言を云はれるなんて、軍隊くらゐ馬鹿らしい處はないな——と、その時はつくづく思つたのである。しかも、軍隊にゐては、つ何が紛失するか分らない。——これは入營する前から私が知り合ひの在郷軍人から耳に蟬の出来る程聞かされてゐた言葉なのである。

さうして私が入營してから三日経ち、四日経ち、一週間経つた。私はもう鼠のコトと云ふぐらぬの音では眼が覺めなくなつた、點呼後必ず一時間毎に廻つて来る不寐番の足音をさへ、まるで一度も聞かずに過すこともあつた。

霜の深い朝——それは入營してから八日目の朝であつた。私はいつもの通り、起床喇叭が窓硝子にビリビリと震動するのを聞いてから、むつくりと毛布をはね退けて起きた。喇叭は鳴りつゞけてゐる。私の眼は見るともなく營庭の真ん中に立つて吹いてゐる裏々しい喇叭手に注がれた。が、意識の底に沈潜してゐる中隊長の入營當日の訓

示、それを裏書する古兵連の話——が、殆ど閃光的に無意識の裡に、私の眼を棚の上下に注がしめたのである。

何か紛失したものはないか——と、背囊、靴、飯盒……と、私の眼は順次に、併し素早く見て行つた。が、突然、私の眼は或る位置へ行つた時、釘付けにされたやうに停まつて了つた。心臓が破裂でもしたやうに大きくどきんと鳴つて、あとはぐつと呼吸の根を止めて了つたのである。私の眼はもう一遍、背囊、靴……と順次に見直して行つた。が、棚下の或る個所へ來ると、やはり呼吸の根を止められたやうな苦しさを覺へて、どうにもならない當惑にぐつと心臓を掴まれた。

水筒が見當らないのである。營倉だぞ——と思ふ。いや、譴責を喰つた上辨償ぐらゐかな——と思ふ。が、それは凡てほんの突嗟の間に私の頭の中に閃いた考へで、あとには、只一つ、弱つた事が出來たもんだ——と云ふ困惑が、大きな溜息と一緒に私

の胸の中から溢れ出した。

どうにかしなければならぬ——これが何よりの先決問題である。が、私には今が今と云つてどうしようも方法がつかないのだ。班長か上等兵の許へ訴へ出るよりほか方法がないのだ。

「分れッ」——

班長の號令である。點呼がすんだのだ。

私は暫く、その方法の考へつく間だけ誰れにも水筒のなくなつた事を知らずまい、と思つた。知らさないでどうにかする——だが若し分つたら？ 針一本でさへ譴責だ、水筒ならば——私の脳は暗くなつた。冗談ぢやないぞ——と云ふ氣がした。

私は庭掃當番に出た。先きの磨り切れた竹箒でもつて霜柱の立つた營庭を無暗矢鱈にゴリゴリ撫で廻した。凡ての不快を忘れようとして。いつもの快活な氣分にならうと

して。竹箒を横にして颯ツと地上を掃ふと、そこには眞白な幾條もの線をもつた弧が描かれる。仲間の新兵達は何かしら冗談を云つては遠慮勝ちな笑ひをその口から轉ばし出してゐる。私はさうした香氣な顔をして冗談を云つてられる仲間が妬ましかつた。私の眼の前にはいつも、自分の盗られた水筒の影がチラ／＼してゐる。何も自分のをえらんで盗つて行かなくなつてよささうなもの——と、そんな泣き言さへ出て来る。盗られた此の不快さ、心の苦しみは自分ひとりが背負はねばならぬものだらうか。他の奴らにも、さうだ、あゝして香氣な事を云つてげら／＼笑つてる連中にも背負はしてやることは出来ないものだらうか。さうすることは悪いことだらうか。各々が交互に人知れず苦しむのならいゝではないか。俺の水筒がなくなつた、俺の水筒がなくなつた——と、かうして順繰りにお互のものを盗みつこする。——それでいゝぢやないか。只一番最初に盗られた俺がその苦しみを一番先きに味はつたよけのことだ。さうだ、それで

いゝのだ——私はやつと暗い心から解放されて、ぐつと力一杯に箒で地上を掃つた。霜がバツと仲間達の襟首にかゝつた、心に屈託のない彼等は、それにも腹を立てないで、アツハハハと聲を立て、笑つた。

掃除がすんだ時、六人の庭掃當番は夫々に箒を擔いで器具庫におつぽり込み、各自の班に歸つた。が、自分の班に歸つた私の眼は恐ろしいものでも見るやうに、そつと自分の棚下を見た。若しかして、先つき紛失したと思つた水筒が實際は紛失したのではなくて、何かの見落しではなかつたか——と。けれどそれは見落しではなかつた。矢張り事實に於てなかつた。

「澤田——一寸こゝへ來い」矢代上等兵の眼がキラツと光つた、のを私は見た。

「はい——」私は反應的に返事をして、矢代上等兵の前に不動の姿整をとつた。胸の中が無暗に騒いだ。

「澤田ツ、貴様は水筒をどうしたんか、あるんならちやんと規定の處へ懸けて置かないくちやいかんぢやないか」

「は——」

睨めるやうに矢代上等兵の眼を瞞めてゐた私の眼は、だんだん下にすべり落ちていつか自分の爪先を見守つてゐる。この瞬間、私の頭には今夜までどうにか誤魔化して置きたいものだ——と云ふ考へが浮んでゐた。

「さあ、あるんなつ直ぐに懸けとけ！」矢代上等兵は急ぎ立てるやうに云つた。が、私の耳にはそれはまるで、なくなつたのを知つてながら意地悪く揶揄ふとよりほか聞へなかつた。

「はい——」私は再びかう云つたきりどうにもならなかつた。もぢくしつゐた。と、この時私は、矢代上等兵の險のある、凄味を帯びた眼がキラツと光るのを見た。私の

口は我れにもなく云つた。

「上等兵殿！澤田の水筒は昨夜寐てる間に盗られちまつたんであります」私は自分のからだが化石したやうに硬張つて堅くなるのを感じた。

「なにッ、盗られた？」矢代上等兵の眼がまた蛇のやうにキラツと光つた。「盗られたのを承知でなぜひとに注意されるまで黙つてほつとくんた。貴様は上等を無視しようといふんだな！」

私は意地の悪い矢代上等兵の出方にもうぐうもすうも云へなくなつて了つた。もう勝手な事を云はせとくほかないと思つた。どうせなるやうにしかならないのだ——何かの場合に一寸行き詰ると、直ぐかう捨鉢になるのが私の癖なのである。で、私は腰をかけてゐる矢代上等兵が頻りにぶつ／＼云ふのを、先つきのまゝの化石したやうな不動の姿整でじろじろ見おろし始めたのである。

が、矢代上等兵は散々小言を云つて了ふと、少しの反應も見へない私に愛想をつかしたやうに云つた。

「上等兵を無視してどうかなるものならして見ろ。これが表沙汰にでもなつて見ろ、おだやかにほすまないからな」

矢代上等兵がくるつと脊を向ふに廻したので、私も敬禮を一つ、その後姿にしてくるつと廻れ右をした。そして新兵仲間の揃つてる中へ戻つて來た。と、そこではしきりに各々の水筒を手にして、自分の特徴を調べたり、或は人知れずこつそりとナイフで疵をつけたりしてゐた。私は何んだか淺間しい氣がした。自分一人を危険人物として警戒してゐるやうに思へてならなかつた。だが、あゝして置けばなくならないと思つてるんだらうか——と思ふと、にや／＼と嘲笑してやりたいやうな薄ら笑ひさへ頬に浮んで來た。持つてないものの強さ——と云つたやうなものが、私の胸の内にあつた

しかし私の眼は私の心を裏切つて物欲しさうに、棚下にぶら下つてる皆んなの水筒に惹きつけられてゐた。あれさへあれば……あれがない許りにどれだけつまらない心配をしてる事だらう。――

砂を嚙むやうな味のない飯を喰べて了ふと、私はまた皆んなの棚下に一つとつぶら下つてる水筒を見ながら思つた。もうかうなつたら仕方がない、營倉だつて譴責だつて聞ふもなかだ、班長に届けちまへ――と。だが腹だけはかう決まつても、私の足はなか／＼班長の室へ向かない。古兵達は意地悪さうな腫を私にくれながら、他の新兵達を警めるやうに云つてゐる。

「軍隊つてえとこはのべつ何かなくなる處だからな、うつかりしちや駄目だぞ。おまけに盗つた奴よりか盗られた奴の方がひどい目に逢ふんだからな。それだから軍隊の事をひとが別世界だなんて云ふんだ」

今更そんな事を聞いても追つ着かないお説教を、私がぼんやり人並に聞いてると、私の耳の直ぐ傍で小さな聲だが鋭く「おい澤田！」と呼ぶ聲がした。私はハツとして振り返つた。聯隊副官の従卒をしてゐる木村と云ふ一等卒であつた。私のからだは器械的に不動の姿整をとつた。

「はい、何でありますか」

「話があるから俺のあとをついて来い。一寸廊下までだ」

私は黙つてついて行きながら、また何か叱られるんかな、と思つた。

木村一等卒はふと立ち留まつて、強いて笑みを浮かせたやうな顔をしながら云つた。

「澤田！お前Y村から來てるんだつてな。俺もY村は近いからよく知つてるが、いつから東京へ出てゐたんだ」